

# 崩落の軌跡

general30

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

閃の軌跡IIのシナリオに色々がっかりした筆者が、light作品と適当に組み合わせてストレス解消するだけの駄文です。読みにくく、不定期更新です。時系列も無視して気に入らなかつた場面を好き勝手に弄り、放置します。原作のままのシナリオがいい！という方はブラウザバックをお勧めさせていただきますので、悪しからず。

目次

黄金の凶星	1
放埒ナル悪鬼	7
絶凍の將軍	18
娘と歌姫	28
皇帝の私兵	38
悪童VS神速	47

## 黄金の凶星

学院生並びにトリスタの市民を救援するべくカレイジャスの離陸準備が急ピッチで行われている。だが、発着場周辺は数多の機甲兵と装甲車で包囲され、離陸どころではない状況に追い込まれてしまった。対抗しようにも、救援物資の搬入を最優先にしたせいで今のカレイジャスにはまともな導力兵器さえ、満足に積み込まれていないのだ。

幸い、カレイジャスの頑丈な装甲で射撃から身を守れてこそいるがこのままでは制圧されるのは、時間の問題だった。  
(くっ！一刻も早く士官学院に向かわねばならないというのに！)

第七機甲師団の兵士たちを統率するのは、赤い貴族服を纏った金髪の青年オリヴァルト・ライゼ・アルノール皇子が、普段の飄々とした余裕など全く伺えない厳しい表情で部下に指示を与えながらも、導力銃とアーツを連発して時間を稼いでいる。傍らで奮闘する護衛ミユラー・ヴァンダール少佐も群がる導力兵器を手にした大剣で、次々と薙ぎ払いながら交戦を続けているが、一向にカレイジャスを離陸させるだけの活路を切り開けないでいる。

(やってくれたな、カイエン公め！ここまでの戦力でカレイジャスを制圧しにかかるとは！余程我々はこの艦に動いて欲しくないようだ。もはや形振りに構ってなどいられぬということか！)

闇のように暗く、雷のように激しい戦意を伴った詠唱<sup>ランゲージ</sup>が聞こえてきたのは、その時だ。

「冥動<sup>めいどう</sup>せよ、我が凶星！

災厄<sup>さいあく</sup>の腕<sup>かひな</sup>を掲げるがためッ！」

見事な銀の長髪とミュラーと並ぶほどの長身にグラマラスな肢体を白い軍服に包んだ美貌の女性。ラマール領邦軍をかつて統べていた女将軍にして、伯爵家の当主を務めるエレボニア帝国屈指の女傑――

——オーレリア・ルグイン伯爵が愛用の魔剣黄金<sup>ゴルト・リッター</sup>の騎士を片手に疾風の如き勢いで加勢してきた！

愛用の魔剣は、かつて帝国を荒らし回った鬼を封じたときされる曰く付きの代物でこの戦場においても、砲火の照り返しを受けて爛々と真紅の輝きを放っている。さながら昂る持ち主の興奮を感じ取り、歓喜しているかのようだった。

「又オオオオオ……！！こ、この剣気は！まさか『黄金の羅刹』ツツ！馬鹿な！何故貴族である貴女が、革新派の味方をするツ！血迷ったか！！」

「私は血迷ってなどいない。少しばかり機甲兵狩りに挑戦してみようと思つてな！」

常人が聞いたら正気を疑うような宣言だが、それに異を唱える者は誰もいなかった。今は一人でも戦力が欲しいのだ。この艦を指揮する光の剣匠ヴィクター・S・アルゼイド子爵は、離陸準備に追われていて艦橋から手が離せない。打つて出ようにも今の状況でノコノコ艦橋から出た所で敵の集中砲火を浴びるだけだ。ヴィクター一人だけならば、強引に艦の外に出ることは可能だが、その場合は艦橋の乗組員が危険にさらされることになる。

艦長として艦を預かる立场上、ヴィクターには可能な限り乗組員の安全を確保する責任がある。だが、彼の弟子の中でも屈指の実力を誇る彼女ならあるいは。この戦局を覆す切り札になるかもしれない。幸いにして高度な導力技術によつて艦の航行は自動操縦が可能だから、そう長い時間戦う必要もない。時間稼ぎさえ出来れば良いと言う周囲の期待に反してオーレリアは、あくまで傍若無人、傲岸不遜な態度で援護など不用。敵兵は全て塵殺すると、不敵な自信に満ち溢れている。

詠唱の最中にも全く手を緩めないオーレリアの剣舞は一刀ごとに重さと鋭さを増し、大地さえ震撼させるほどの衝撃をもって群がる敵兵たちを粉碎していく。

「死が満ちる、死を満たせ、死を杯へと注ぐのだ

嘲笑と蹂躪と欺瞞と冒瀆で見渡す戦地を猛火で染める！」

打倒したい、刈り取りたい、我が行く手を阻む者は皆塵殺すると宣

誓するは、災禍の調べ。魔剣に封ぜられた魂を呼び起こす魔剣士の切り札。ディザスター・スペルと呼ばれ、魔導師たちすら忌み嫌う禁断の呪法である。魔剣に封じられた存在の格に比例して、一時的に爆発的な力を獲得できるが、その代わりに極めて術式の制御は難しい諸刃の剣。ましてやゴルト・リッターに封じられた鬼の格は星杯騎士団を擁する封聖省でさえ手を焼いたという伝承にも名を残すほどの強者だ。

いかに鍛え抜いた剣の達人と云えど、そんな化け物を武器ごしとはいえ、従わせるなど尋常ならざる難易度であり無謀もいいところだ。誰もが思い、彼女を止めようとしたが――

「鮮血の鎧を纏え！両手は呪詛を携えよ！

軍馬に騎乗し突撃すれば、敵兵はものみな等しく骸の山と成り果てようぞッ！」

どういう不条理か、はたまた相性の成せる技かオーレリアはゴルト・リッターに巣くう鬼をも容易く屈服させ、己の従僕として見事に飼ひ慣らしてのけた。その証拠に並みの担い手なら、躰せるはずのなにかつての鬼の姿と声がうっすらと彼女の背後に見えているではないか。

ただの刺突に鬼の闘気までが合わさり、その刺突の間合いは導力ライフルにさえ匹敵する間合いにまで延長される。滑走路を塞いでいた機甲兵がパイロットごと装甲を崩壊させられ爆死する。向かいのガトリング砲で支援射撃をしていた装甲車が、返しの薙ぎ払いで両断され横転する。まるで大型の竜巻でも荒れ狂っているかの如き、人間技の範囲を著しく逸脱した恐るべき暴威に味方であるはずの第七機甲師団のメンバーたちでさえ、呆気に取りられて見入ってしまう。

「に、人間技じゃないねコレっ！ミユラー君、君の姉弟子は何処からあんなとんでもない魔剣をぶん取って来たんだい!!」

オーレリアのあまりの暴れっぷりに取り乱してミユラーにすがり付くオリヴァルト。鬱陶しげに叫んでミユラーは答える。

「発狂した執行者No. VIIから強奪して己の物としたらしい!!全く………この目で見るまでは眉唾物だと思っていたが、まさかこれほ

どとは！つぐづく敵に回したくない方だ……………」

「ヴァンダール少佐！離陸準備が整いました！

ここは我らに任せて乗艦して下さい!!」

部下から伝令を聞き、急いでカレイジャスに乗り込むオリヴァルトたち。銃撃を弾き返しながら豪胆に笑うオーレリアには、まだまだ余裕がありそうだ。巻き込まれぬ内に退散するが吉だろう。見れば、詠唱の効果ゆえか一時的に活性化した七耀脈が、真紅の輝きを帯びて鳴動しているではないか。

（冗談抜きで彼女は敵ごと、この発着場を破壊し尽くすつもりのようにだ！何と無茶苦茶な！アルゼイド子爵共々守護騎士の予備役に数えられているというのは伊達じゃないということか）

「オオ……！嘆かわしきかな、憐れなる獲物が朽ちる！

打ち震えるかなツ！無価値で無情な生命よ！

ただ理不尽に散り逝く獲物、これぞ戦禍の愉悦なりっ！」

周囲の敵を引き寄せるアルゼイド流の剣技、洗閃牙で群がる人形兵器を纏めて引き寄せ、一太刀の元に両断する。吹き荒れる剣風は黄金と紅蓮、二つの闘気が入り交じり、普段は美しいオーレリアの顔を悪鬼の如き装いで彩ってさながら戦化粧のよう。死角から勇敢にも突撃してきた5人の兵士を振り返りもせず、オーレリアは抹殺する。

「技後の硬直を狙うという発想は良かったが……………甘い弱卒。私の剣は少々悪辣だぞ……………非力な女の身故、様々な工夫を施した。ヴァンダールの剣を取り入れたこともその試みの一つに過ぎん。どれ貴族らしい優雅さなど微塵も備えぬ邪剣だが……………冥土の土産に堪能するがよからう」

ラグナ・バインドと呼ばれるヴァンダール流の戦技の一つだ。手から放った闘気で相手を一時的に麻痺させると同時に間合いを使い手の意のままに制御するという、補助的な技だが——オーレリアが繰り出したラグナ・バインドは、何の予備動作も無かった。背後から迫った敵が5人纏めて、巨大な鬼の腕で薙ぎ払われたかのような衝撃を受けて死亡する。無惨な死体の有り様は、まるで爆弾でも喰らった

かのような惨状だ。扱う者の闘気の桁が違えば、このような小技でさえ、常人には抗いようのない殺人技となる。続けて、殺到する銃弾の雨も無造作に振るう大剣から放たれる衝撃波で1発残らず叩き返す。「ば、化け物め！撤退ツ！撤退だああああ!!」

「逃がすと思っただか逆賊共!!」

咆哮と共にデイザスター・スペルが遂に完成する。

荒ぶる鬼との同調率は過去最高の域に突入している。

今なら執行者であろうと、斬り伏せて勝利するとばかりに真紅の剣風が唸りを上げて乱舞する。

「悪夢の如き蹂躪だけが我等を至福に誘うのだ…!」

城塞の破壊者は安寧こそを薙ぎ払わん!

悠久たれ、幕引きたる怨嗟の夜よ!

偽神共の弾劾さえ、我が悦びを裁くに能わず!!

ギガス・ノウア  
超凶星――

慈悲無く、赦し無く、殺戮に狂う羅刹ツ!!!

荒ぶる災厄の鬼が稀代の相棒を経て再び現世へと舞い戻った!打ち放たれる烈光は、機甲兵の装甲すら解体する理不尽な魔力を帯びて、昂る主人の剣技を伝説の域にまで昇華させる。その活躍は、もはや人間の域にあらず。旋回性能や機動力では、生身の人間など及びもつかないはずの機甲兵が何の抵抗も出来ずに蹂躪されていく悪夢の如き光景が展開されていた。一撃ごとに大地が裂け、吹き荒れる未知の魔力が機甲兵の制御を攪乱しているのだ。こうなっては機甲兵も鉄の棺桶同然だ。

「これでさらばだ!奥義、烈洗乱舞ツ!!」

アルゼイド流の奥義である、閃光を纏った回転剣舞に拳や蹴りを交えた乱撃を放つ技・烈洗乱舞を受け、配備されていた5機の機甲兵のうち、最期の1体が撃破された残党にはもはや一片の戦意も無く遅れて合流してきたオーレリア將軍の部下たちによって拘束されていた。





## 放埒ナル悪鬼

「おいおい、その女の言うことを信じちゃあいけないぜ」

嘲笑の響きを含んだ声と共にアルフィンとエリゼを拘束していた黒い機械人形——クラウ・ソラスというらしい——が突如として二人の拘束を解き、急速離脱を試みるが何らかの衝撃が作用したらしく、大きく仰け反った。

「あうっ！」

制御者たる銀髪の少女アルティナ・オライオンが苦痛に歪んだ表情に驚愕の色を帯びた声を漏らして後退する。クラウ・ソラスには、高度な索敵機能と駆動者を守る障壁や浮遊を可能とする機能がある。にも関わらず、

索敵が間に合わず痛撃を受けた。その事実には普段なら冷静なアルティナも動揺を隠せない。

（新型の導力兵器？いいえ、それならクラウ・ソラスが感知できるはず。それにこの威力……！導力砲の衝撃とも全く違う。まるで巨大な熊にでも殴られたような……！）

「どういうつもりよラングレンツ!!私の計画の邪魔をすると言うの！時代遅れの悪鬼がツ！姿を見せなさい！」

美貌にはつきりと焦りと怒りを滲ませてヴィータ・クロチルダが叫ぶ。その表情にはリインたちに見せていた余裕が微塵も感じられない。隠しようのない恐怖と怒りのためか、愛用の杖を握る手が力を入れすぎて震えている。怖れているのだ。未だ姿を見せない第三者を。魔術で投影した幻像に過ぎぬ身では、瞬時に抹殺されることさえ有り得る、埋めようの無い実力の差を。

「ククク……ハアツハハハハハハツ!!」

誰もが忘れて久しいオレの名をアンタが覚えていてくれたとはねえ！マルス・ラングレン……只今参上！」

エリゼとアルフィンを守るように立ち塞がる紅蓮の鬼が滴りそうな愉悅の気配を撒き散らしながら、姿を現した。大きい——— 3

アージュ半ばに届く巨大な体軀に素人目にもはつきりと分かるあまりにも禍々しい殺意。

4つの赤い眼に焰のごとき蠶<sup>たてがみ</sup>。体軀の均衡からはアンバランスなまでに大きい両腕の先には、見るからに兇悪な形状の爪がある。それは分かり易すぎるくらいに有名な異形の存在。いにしえの騎士と魔女、あるいは王と幾度となく戦ってきた禍々しき地獄からの使者。鬼神そのものの姿。

「何をしに来たかだつて？それこそ知れたことだろうに。——死を。見るも無惨な塵殺劇<sup>わうさつげき</sup>を！いにしえよりこの地を巡る苛烈で無情な運命に牙を剥くために！」

禍々しい大爪を掲げ、猛火の如き熱情を込めて鬼は宣告する。一方でリインやトヴァルは、彼らの言っていることの半分も理解できない。突如として現れた紅蓮の侵入者に険しい警戒の視線を向けることしかできず、事態は硬直状態に陥ったかのように見えた。

はつきり言つてリインはおろかトヴァルにも、目の前の鬼がどんな手段を用いて現れたか、全く分からない。巨大な体軀からは今まで経験したことがないほどの殺意を感じるが、足音もあの巨大な体軀を支える雪が積もった地面にも足跡1つ残つてはいない。リインたちが全く知らない未知の技術だろうか？士官学院を襲撃した人形兵器<sup>パンツァーソルダ</sup>機甲兵とも異なるし、先ほど吹き飛ばされたクラウ・ソラスとも異なる存在のようだ。第一、クラウ・ソラスと同じ技術が使われている存在ならば、ああも簡単に痛手を負わされたりはしないだろう。

「おい、何を他人事みてえに呆けてんだ？はつきり宣言しなきゃあ分からんのか。だったららはつきり言つてやらあ！オレはとあるエレゴニアの騎士に使役される身で、

お前たちの味方だよ！これでいいか!？」

鬼が肩をすくめてリインたちに自分の立場を明かしてきた。そういえば先ほどから鬼は、一度としてエリゼやアルフィンに危害を加えてはいない。しかし——

「何故身喰らう蛇に属する化け物が俺たちに味方する！内部抗争はご法度じゃなかったのかい？」

笑い飛ばす鬼面。

「ハン！アンタも無駄に疑り深い男だねえ、トヴァル・ランドナー。オレらだつて場合によつてちゃあ、仲間割れくらいするさ。当然だろ！所詮はヒトの集まりだぜ——利害の不一致、感情の不一致、得意とする技能面の不一致、よくあることだ。一々語るまでもねえだろうがよ、ンなことあ！それにオレが執行者だつた時代は大昔もいいトコでなあ。今さら契約を反故にしたことで何らかの被害を被るような立場でもねえのさ、これがな」

喜悦を滲ませて一気にまくし立てるマルス。

「分かつたらさっさと姫様方を連れて下がつてな！」

「さあ兵士諸君！間引きの時間だ、これより審査を開始しよう。空の女神とやらへの祈りは済ませたか？覚悟は決まつたか？ならば雄々しく立ち向かえつ！」

「帝国の覇権を争う舞台に馳せ参じたいと願うなら！」

「そして喰らわせるッ！甘美なる憤怒を狂気を絶望を！」

それこそがオレの飢えを満たす唯一の糧かてなのだから！」

4つの赤い眼が青を基調とした武装集団北の猟兵たちに向けられ、塵殺劇の幕が上がる！

その凶行はあまりにも迅速で陰惨で、惨たらしい。ただ踏み込んで巨爪を薙ぐ。たったそれだけの単純極まりない進撃で鍛え上げられた北の猟兵の一個小隊が、虫けらのように蹂躪されていく。巨体からは想像もできぬ尋常ならざる高速機動と銃弾や導力をも一方的に消し去る漆黒の闘気を纏つたマルスの猛攻は、クロチルダにも止められない。ただ堅牢で速すぎるのだ。彼女の本体を転送してありつたけの魔力を注ぎ込んだ一撃を命中させたとして紅蓮の鬼はびくともしないだろう。第一にクロチルダには、優れた魔力はあつても戦闘経験そのものは豊富ではない。マルスは攻撃方法こそ単純だが、近接戦闘の技術は非常に高い領域で完成されている。豪爪を振り回すタイミン、多数の相手を的確に刈り取るための位置取り、突撃の速度の緩急、具現化と霧化を織り混ぜた人間には不可能な悪夢のような猛撃の乱

舞。

身喰らう蛇が有するメンバーにも、様々な異能の相性というものが存在し、一概に誰が最優であるかを論じるのは難しい。『外の理』を帯びた武具であっても、そういった相性からは完全に無縁という訳にはいかない。

第一彼女ら蛇アングィスの使徒の役割はあくまで計画の進行だ。戦場で直接相手を殺す役割など、不得意であっても構わない。七柱のように完成された武力を持っている方が少数派なのだ。そうでなければ結社として執行者などというコストのかかる人員をわざわざ選出したりはしない。

「どうしたどうした人間よ！いつからお前たちはこうまで脆くなったんだ？更なる気概を真価を狂気を！振り絞ってみな！信じてるぜえ！お前たちは1度はオレを封じてんだぜ？絶望するにはまだ早い！打倒できるんだよ！

不可侵なんかじゃあないのさ！カカカカカッ！」

笑う、嘲笑う、鮮血を浴びて殺戮の愉悦に浸るマルス。効かぬことは百も承知でクロチルダが魔力を帯びた剣を放つ魔術・魔剣踏舞で牽制を試みるが、案の定マルスには通用しない。

「失敗に終わった計画に幕を降ろす役目だった貴方が何故私に今さら逆らうの？『將軍』の差し金？それとも『破戒』殿の意向？」

「さあてどうだったかねえ？『將軍』の依頼だったら従うのもやぶさかじゃねえが——今回は違うなあ。

第一今のオレは担い手に使役される飼犬みたいな身分なんでね。担い手と利害が一致すりゃあ、アンタらにだって場合によっては牙を剥くさ！何故なら今のオレは、彼女に使われる武器だからさあ！戦場で血を浴び、憎悪を喰らい、欺瞞と嘲笑をもって戦地を染める！これぞ魔剣の誉れなり!!ククク——ハアッハハハッ!!」

「埋葬、尋問、拷問、葬儀に祈りその他諸共オ！」

オレが省いて消し去ってやるよ！喜べ！苦しむことはもうないさ！災厄に巻き込まれて苦しむ前にオレが解放してやるよ！——

「つとお、んなこと言ってるうちに片付いちまったみたいだなあ。何とも物足りんぜ。華を添えるつもりだったのになあ！ククク、ああ残念無念！」

殺戮劇は既に終わっていた。ユミルの町にあれだけ展開していた北の猟兵と一部の領邦軍に属していた兵士たちが怪物の蹂躪によって一人残らず消し去られている。

死体の痕跡すら雪の上に僅かな赤い染みとなって残っている他には、何の痕跡すら見出せない。まるで鉛筆で描いた絵を消しゴムで消した時のようにあまりにもあっけなく消失させられていた。

「アンタは蛇の使徒として、あまりにも自覚が足りてない。オレらは別に偉ぶりたい訳でも、三下相手に余裕かましたい訳でもないんだよ。」

アンタは歌姫としては紛れもなく優秀だが、将としては無能に過ぎる。リベールでの計画とは色々事情が異なるのに、提示された脚本は『白面』の焼き増しのような劣化品ときた！戦力に対する分析が甘い。他力本願に過ぎる。選抜したメンバーの人選にだって大いに問題あり！とどめに同じ位階の使徒の忠告すら無視とくる。

これでストライキを起こすなって方が無理があるだろう？」

「撤退を推奨します、クロチルダ様。現状の戦力ではマルスの制圧は不可能と判断せざるを得ません」

「クツ……どうやらそうするしかないようね。全くとんだ番狂わせだわ」

「ああ、そういうや忘れるトコだった。『將軍』から馬鹿弟子殿へ伝言だ。鼻っ柱をへし折ってやるからかかってきな、だとよ！」

「な！『將軍』までが参戦すると言うの！これは最初から全力でことに当たる必要が出てきたようね」

もはや捨て台詞を残す余裕さえクロチルダにはないようだ。リインたちには目もくれず、即座に姿を消してしまう。

「さあてと、未熟な同朋リイン・シュバルツアーよ！」

何から聞きたい？お前に宿る異能についてか、今後の自身の立ち位置か、お仲間の安否か、さっきの歌姫殿の発言のどれが真実で何が偽

りなのか、何から話したもんかねえ」

「Ⅶ組の皆は無事なのか？」

「ああ、全員無事さ。ただ無傷とまではいかなかったようであ………アリサとエリオットは、機甲兵相手に限界を超えてアーツを使っちまったみたいだね。今回の内戦には参戦できそうもない。他の面子は五体満足だが、参戦するかどうかは、よく相談して決めな。

戦火に巻き込まれて否応なしに迎撃を強いられた開戦前とは、状況が全く違う。お前らは急場凌ぎの学生で構成された寄せ集め連中だった。ばつさり言っちゃまうなら正規の戦力としてカウントされない。だからこそ撃退程度の成果でも評価されたんだ。

だがこれからは違うぞ。れっきとした戦力としてお前たちには動いて貰う。殺しは嫌だつて言ってもお前に拒否権はないぜ。何せ、既に貴族派——内戦の引き金を引き、同時多発的に襲撃事件こそ引き起こした連中はカイエン公爵を始めとする、ごく少数のメンバー——にやお前は既に最優先の攻撃目標としてマークされてんだからな。そこんとこしつかり理解しといてくれよ」

「正規軍や皇族の状況はどうなっている」

「トヴアルに少し嘘を言ってもらうことになっちゃったが第一師団を除いて、対機甲兵部隊に対する偵察及び戦術の構築は完了してる。一気に奴等を撃滅しなかった理由は、あくまで皇帝陛下の指示によるもの」

「どうなっているんだ。ここまで彼らの横暴を見過ぐす理由はないはず」

「察しが悪いな。エレボニア帝国はゼムリア大陸でも屈指の軍事大国だぜ？そうだな………お前の親父さんがよくやる狩猟で考えなよ。真っ正直に獣を追っかけてたつてそう簡単に狩れるもんじゃないだろう？たとえ銃を持っていたつてな。そこでどうするか——罾を張る、餌をちらつかせる。戦もそういった考えで敵を弱らせ、叩き潰すために様々な要素を利用する。目先の勝利にだけ拘泥するのは三流のすることさ。今は貴族派共が勢い付いているように見えるが、こいつは意図してやっつてることだ。」

ちよつとでも軍事をかじった者なら、分かるはずなんだがな。自分たちの優位が、でつち上げられたモノだつてことによる。奴らは街の統治や経済活動という面についてちやあ腐っても有能だが、規模のデカい戦争に関しちや素人丸出しだ。大規模な戦争じゃ自分の周りが勝つていたとしても、広い視点に立てば劣勢に追い込まれているつてことも往々にしてある」

鬼の口から語られるとは思えぬマトモな軍事の知識にリインも呆気にとられている。

「まあちつとばかり脱線したが、お前が絶望するような事態にはなつてないつてことさ。何も真つ向から大火力をぶつけるだけが戦争じゃない。新兵器を導入されたら綿密な偵察や戦術を構築して、相手の強みを削いでやりあいい。どんなに大層な兵器つたつて所詮は、人間が乗らなきや稼働しねえんだ。だつたら、搭乗される前に乗組員を殺しちまうなんて手もあるなあ。外が駄目なら内側から、爆弾なりを仕掛けて操縦不能にしてやるつて手もありだ。お前らは知らなくても無理はないけどよ、正攻法だけで決着が着くほど、戦争は甘くない。

機甲師団の陸戦での破壊力ばかりが取り沙汰されるが、場合によってはそういう潜入作戦に長けた部隊が投入される。あとはさっきのオレが見せたような一方的なワンサイドゲームが成立。哀れにも退路を断られた賊軍は、一人残らず地獄行き！これにて幕引き、舞台はハねる。皇帝陛下の威光に陰りはなく、正規軍の練度にいささかの狂いも無し、と陛下の描く筋書きはまあこんなもんだ。貴族連中をわざと調子づかせて淘汰すべき輩とそうでない輩を選別し、ふるいにかけて形成がひっくり返った後で査問に掛ける材料として利用すると。

カカカカツ!! 全くもって容赦がないねえ」

「俺たちが仕官学院で見せられた映像は、どこまでが真実だったんだ？」

「鉄血宰相が撃たれたトコを除いてほとんどの映像が嘘っぱちよ！第一おかしな点がやたらと目立ったろ、あれ。」

やけに穴のある警備に、狙撃犯を即座に射殺しない軍人、市街地に被害が出る可能性が高いにも関わらず、無作為に主砲を撃つ戦車部



隊、と後から冷静に考えりやおかしな点だらけだ。そしてお前が気にしてるクロウ・アームブラストについても偽りにまみれてやがるぜ」  
「ちよつと待つてくれ！俺はクロウと騎神ごしとはいえ直接話して姿も見ている！あれは確かにアイツのはず……！」

「おいおいリンよお、お前少しはモノを疑つてかかるクセを付けた方がいいぜ。お前は魔導についてどれだけ知ってるんだい？戦術オーブメントの助けを借りずに、ちよつと火を起こしたり傷の治りを早めるくらいのことしか知らん訳だろう——ましてや彼女やエマが属する集団の魔術がどういう性質を持ち、どんな状況で最大限の力を発揮するか、知ってるのか？——それさえも知らずに仲間だからって発言内容の全てを鵜呑みにしちまうのは、少々頂けねえなあ。そこんところも説明してやるから今は黙つて聞きやがれ」

「彼女らはさつきトズラこいたクロチルダも含めて、ヘクセン・ブリード魔女の眷属という名前の集団に属していた過去があんのさ。で、そいつらの役目がお前が遺跡から見つけ出して、さつき魔煌兵をぶちのめした騎士人形『灰の騎神』ヴァリマールに携わる諸々の管理を司る時代遅れでつまらん日和見主義者の集まりなんだ。まあ魔導の一派を構成する連中の中じゃあ、良心的で保守的だ。少なくとも余程ヤバい事態にならない限り、それこそ『至宝』

絡みの危険な事が起きないと何の行動も起こさないウスノロ共だ」  
「彼女たちに何か恨みでもあるのかアンタは？」

「まあそれは今回の戦とは無関係だから省くが、奴等の役目は騎神を動かせる人間を導き、支えることがお役目らしい。つまりはお前に対して害意や悪意が存在する訳じゃない——だがよう、なにぶん若くて未熟な魔女見習いだ。

未だに行使できない術式なんかはまだまだ山とある——そうだよな、使い魔」

「ええ。ソイツの言ってることは事実よ。だからこそ魔女として半人前なエマを補佐するためにアタシも同行してたって訳」

「結論からばつさり言っちゃまうとエマの見立て違いだな。

狙撃事件の衝撃が大きすぎて議論してる余地が無かったから混乱

するのめやむを得ないがね。軍人が語ったクロウの経歴とアイツの年齢を鑑みると、どうもしつくりこねえんだよ。幾ら天才的な才覚があつたとしても、荒くれ者やならず者、猟兵崩れ、現体制に不満を抱く退役軍人辺りが帝国解放戦線の主だったメンバーだつたらうが……そんな一筋縄では行かない犯罪者共がそんな短期間であつさり手懐けられるモンかね？ましてや学生稼業のついでにだけ？軍資金はカイエンの阿呆が出していたと仮定すりゃ話は通るが、構成員の練度までは一朝一夕で仕立てあげられるモノじゃあない。お前たちも厳しい訓練を受けたから分かるよな？軍人ほどの練度が全構成員には求められないとはいえ、一般人に紛れ込む偽装工作や武器を隠し持つてゐることを悟らせないようにする技能。どうやって法の目を掻い潜り、シンパを増やすとか様々なハードルがある。……いくら天才だとしてもオーバーワーク所の騒ぎじゃない。——ただお前にとっていい知らせとも言切れない点は、帝国解放戦線のリーダーはクロウ・アームブラストと極めて近い間柄つてことだ。使い古された三文芝居みてえだがあの組織のリーダー『C』の正体は——クリストファー・アームブラスト。お前の先輩によく似た兄貴が正体つて訳だ」

「じゃあクロウはこの内戦とは無関係なのか!？」  
「いや紛らわしい行動を取っちゃったクロウも悪いが、敵も中々やりやがる。アイツにも起動者としての適性があつたみたいで……捕まっちゃったんだよ、貴族派に。マヌケなこつて。憲兵隊に自首させるつもりでノコノコ帝都にまで出向いちまったもんだからあつさり殴り倒されて拘束されてんだとよ。どんなおめでたい頭をしてんだか?」

「クロウはどこに居るんだ?」  
「さあね。奴等の旗艦『パンタグリユエル』とか言つたかあれに捕まつてんじゃねえの?」

「続けて聞くぞマルス、アンタの主人の名前は?」  
「カカ、帝国では有名な武人の一人だよ。アルゼイド流とヴァンダー

ル流、2つの流派を修めた『光の剣匠』ヴィクター・S・アルゼイド子爵の一番弟子『黄金の羅刹』オーレリア・ルグイン伯爵。彼女が今、オレを使役する『担い手』だ。いくらお前でも知ってたか？カカカカカ」

「勿論だ。領邦軍でも1、2を争う実力を持つ女將軍だろう。彼女がアンタの主人なのか………なんだか納得したよ。『光の剣匠』に限りなく近い領域にまで到達した帝国に現存する、元騎士階級だった貴族たちの筆頭とも目されている武人だ。確かに彼女が噂に違わぬ実力の持ち主なら、アンタが宿る兇剣ハガル・ヘルツオーク、ゴルト・リッター、ニグレド、戒王剣ネプテユース、それらの魔剣の一振りを手に入れていたということになるか」

エレボニア帝国に古くから伝わる英雄譚などよって存在が噂されている魔剣。『破壊を統べる君主』、『黄金の騎士』、『崩落の黒騎士』、『魔を喰らう戦神の牙』など様々な異名をもって語り継がれる魔剣。本当に現存するかは定かではないが、彼女オーレリア・ルグインはそういう魔剣を何処かの組織との戦闘で強奪したらしい。

「マジかよ……！眉唾物の噂話だと思っていたが、そんなヤバそうな剣を管理してそんな連中といやあ、身喰らう蛇の連中しか思い付かんなぜ。——けどそれならなんでそんなヤバそうな魔剣を所持してる貴族を七耀教会は野放してるんだ？アインの奴が嬉々として回収に向かいそうなモンだが」

「実際に色々と安全装置は掛けられてる。定期的に教会お抱えの特殊な鍛冶師に制御術式やら何やらと、色々と妙な鎖やら呪いやらで簡単に暴走しないように手が入ってるのさ。こう見えても本体、今の身体ともに七耀歴から見ると意外と最新式の兵器の1種でもある、カカカ！宿ってる剣の銘はゴルト・リッター。

ついでに今の身体は、傀儡みたいなモノでなあ。本体はあくまで魔剣の方だよ」

「製造方法は？」

「主人が拠点としてる海都オルデイスには、トールズの旧校舎によく似た遺跡があるんだが——そこには何故だか魔煌兵がゴロゴロ

出てきてなあ。そいつらをぶっ散らばして回収した魔導の素材やら合金やらかき集めて、かつてオレに似た魔導兵器として完成させたつて訳だ」

「さてとリイン、オレもいい加減喋り疲れた。長話に付き合わせて済まねえが、お前にはオレのかつての上司と会って貰うぜ。お前の異能の話はそのお方が話してくれる手筈になってる。……ただ一つだけ言っとくぜ。お前を取り巻く因果は冷徹にして悪辣、『將軍』と会った時に突き付けられる絶望は半端なモノじゃない。覚悟してかかるこつたな」

## 絶凍の將軍

ユミル襲撃から一夜が明けて、十分な休息と負傷者の手当てを終えたリインを町外れの雪山で待っていたのは、陰気な金髪の男性だった。年齢はよく分からない。ナイトハルト少佐よりやや上の年代にも見えるが、その厳格で静謐な眼差しは深い知性を伺わせる。白に近くすんだ色合いの金髪に着古した砂色の外套。頑丈そうな防刃加工の施されたブーツに腰の鞆とホルスターに納められた軍刀と大型の導力銃。そして何よりも人目を引くのは男の右手から肘までを覆う時代がった漆黒の籠ガントレット手であろう。男の屈強な体格とガイウス並みの長身とが相まって、まるで死神のごとき不吉な威圧感を醸し出している。

(この人がマルスの言っていた『將軍』なのか？パツと見たところ正規軍人ではなさそうだが……何処かで会ったような気もするな)

何処だったろうか——はつきりとは思いつけないがユミルでこの人を見かけるのは初めてではない。記憶を反芻するリインを視界に捉えると、男は低く錆びた声を発する。

「久しぶりだなリイン。俺のことを覚えているか？」

「いいません。微かに記憶に引つ掛かってはいるんですが……」

リインの気のない返答にも男は気分を害した様子は見せない。

「まあ無理もない……この町に立ち寄ったことは数える程の回数しかないからな。大型魔獣の討伐と老師の付き合いで訪れた程度だ。——俺の名はディック。この国で魔獣討伐などを生業にしている便利屋だ」

差し出された籠手ごしに握手をする——途端にリインの胸のアザ辺りに強い痛みが走った！

(アグッ……！一体何が起きている!?)

恐い……！

恐ろしい……!!

オゾマシイ……!!!

眼の前の男が、どうしようもなく、抗いようもない程にただただ我慢がならない！

今すぐに、男の眼前から撤退したい、脇目も振らずに逃げたしたくて叶わなくなった！

何だ！一体何がナニをどうなつて自分はこの人ヲ!!

一瞬にしてリインの本能に沸き上がった恐慌と急速に湧いてくる力！かつて幼い頃にエリゼを救い、魔獣を惨殺した忌まわしい力が、かつてない程の勢いと熱さで伝えてくる。眼前の敵との底知れぬ戦力差と絶望を。

本当にアレに抗う気か？

未だに剣を抜いてさえない、丸腰の相手にしか見えない。だといふのに、何だこの危機感と絶望は？アルゼイド子爵と初めて立ち合った時すら比較にならない。

「やはり反応するか……：剣を抜け、小手調べをしてやる。

先に言っておくが手加減は無用——来い！」

「オオオオオオオオオオオオオツ!!!」

訳も分からぬままに突如として発動したリインの内に潜む“ナニカ”が急速に彼の姿を変貌させる。禍々しい真紅のオーラに白く染まった頭髮。本人が意識するより遥かに速く、鞘から抜き放たれた太刀が陰気な金髪の男に迫る！

今までで間違いなく最大の一刀だったリイン渾身の一撃。紫紺の炎を纏った横殴りの抜刀は、普段のリインが届く全力を軽く凌駕している。Ⅶ組メンバーで、最も防御に長けるガイウスでさえ今の一刀ならば槍ごと打ち破れるだけの力が込められた必殺の一撃——それをディックは容易く防いでいた。右手にはいつの間にか抜刀した軍刀が握られ、炎を纏ったリインの一撃を小揺るぎもせずを受け止めている。すかさず次の攻撃に移るリインだったが、立て続けに繰り出した連撃すらディックは揺るがない。速さと技巧、判断力、いや単純な身体能力さえ自身を遥かに上回っている。本気で殺すつもりで刀を振るっているというのに幾度、剣戟を加えようと眼前の男は陰気な表

情を崩さない。帝国解放戦線リーダー《C》やサラ教官さえ凌駕するかもしれない。それこそ光の剣匠ヴィクター・S・アルゼイドにさえ比肩し得る見切りと剣捌き。しかも彼は未だに納めた導力銃を使う素振りを見せていない。完全に守勢に入って反撃の素振りさえ見せないというのに、まるで勝てるビジョンが浮かんでこない、こんな状況は初めてだ。

「そんなものか……リイン。お前の力は？馬鹿弟子と同じで進歩がないな。気概、信念、危機感、技巧、全てがまるで至らぬ木偶の剣だ。小手先の技量こそ伸びたが、やはり芯から脆い心根ばかりは治せんか……失望させてくれる。……剣匠殿はお前の畏れを振り払ったようだが、お前はまた道に迷いつつある。仕方がない、剣術指南など柄ではないが、今一度お前に教えてやる。——慈悲など存在しない戦場の現実を。そしてお前の現状に置ける立ち位置を。——絶望と共に教えてやろう。全霊を持って抗え……！」

「捨てた称号の一つだが、この戦時に限って再び名乗らせて貰おう。執行者No. XX『絶凍』のドレクスラー。往くぞ、逃れ得ぬ死を掲げるがため」

かつてユミルで事件を起こした怪盗ブルブランと同じ名乗りと共にディックの気配が——いや存在が変革していく。漆黒の籠手を核として、変貌していくその異質な存在感はまるで人型の奈落だ。何処までも昏く、深く、冷えきった果て無き群青の深淵。氷の断崖に叩き込まれるかのような、別次元の存在感にリインの膝が折れそうになる。

立ち去る前に名乗ったクロチルダすら、ディックの放つ威圧感の前には市生の小娘同然に思える。それどころか、北の猟兵を蹴散らしたマルスさえも凌駕しかねない尋常ならざる闘気には吐き気と目眩さえ覚えるくらいだ。

周囲の気圧が極大の冷氣に軋みを上げ、一瞬の内に無数の氷の杭が形成される。ディックの周囲を守護するように展開され、空中で静止。ゆつくりとしたスピードで旋回する氷の杭が、次の瞬間一斉に放たれる！

「くっ……！」

慌てて回避に移るリイン。既に頭髮は普段の黒に戻っている。あまりに巨大な冷氣に干渉でも受けたのか、先程から全く力が湧いてこない。不味い状況だ。しかも氷の杭の直径はリインの腕回りほど大きく、まさに凶器と言った禍々しいオーラを纏っている。あれほど巨大な氷の杭を僅かな時間で形成する魔力、それをリインの退路を的確に断つように微妙な時間差を置いて杭が殺到する。時間差攻撃、予測射撃、包囲射撃、十字砲火、偏向射撃、フェイント、どれを取っても確実に敵を破壊するべくして徹底された、一片の慈悲も無き蒼白の弾幕。エマも魔力を用いて似たような術を見せたことがあるが、これとは比べることも愚かしい。杭の精度、緩急、死角から狡猾かつ間断無く到来する計算され尽くした攻撃の嵐は、さながら軍勢からの波状攻撃だ。

殺到する氷の杭の波状攻撃。リインは極限の集中力を発揮して杭を捌きながらがむしやらに太刀を振るうが、

(ぐうう……！何て重さと冷氣だ！導力魔法の比じゃないぞ！)

杭のあまりの威力と冷氣にたちまち身体が硬直してしまい、どうしてもディックとの距離を詰めることができない。彼は退屈してきたのか、戦闘中だというのに剣を納めタバコを一服する始末。南国の果実めいた妙な香りだったが不思議と嫌な感じではない。1本を吸い終わると、渋い顔をして吸い殻を携帯灰皿にしまう。続けて指を鳴らすと、先程から展開されてきた氷の杭があっさり消えてしまう。

「軽い……脆い、そして詰まらん。この程度の布石でもう終いか、未熟者。当然の結果だが残念だ。これでは幕を降ろす価値も無い。師から教わった剣が泣くぞ」

全霊で杭の弾幕に抗ったリインだが、想像していた以上にディックの射撃は正確無比で、気が付けば身体中の関節を氷の杭に貫かれていた。普通なら大量出血で死んでいてもおかしくない状態だが、蒼白の杭はリインの動きを阻害こそするが、全く痛みを感じさせない。肘、肩、膝に鉄枷でも嵌められたかのような重さと全身に巡る熱さとも冷たさともつかない違和感があるだけだ。



手足の感覚も鈍るばかりか、刀を手放していないのがリイン自身にも不思議な位。やがて平衡感覚すら乱れ始め、無様に雪原に倒れ伏すリイン。

「お前が畏れる力なぞ所詮はこんなものだ。御し方さえ分かるならこんな芸当、軍人が数人集まれば容易に達成できる。少々物珍しい自己強化と生命の危機に応じて、勝手に発動する常人よりも少しばかり優れたリミッター。自己防衛の本能に基づいた、人間であれば誰でも備わっている機能に過ぎん。それが多少、魔の理に染まって常人よりも強力になり、強い攻撃衝動を伴っているというだけ。……大して不幸なケースではないな」

リインの苦悩などまるで大したことではないと、事も無げにドイツは語る。

「そ、その理とは……何なのですか？」

「言葉通りの意味だが。文字通り、闇の領分に属する人間を変質させる数多の因子の一つ。変質の度合いは人それぞれだが、切っ掛けが無い限りそう簡単には発狂したりしないものだ。お前に宿る力は十分に御せる範囲に含まれるモノ……他者に大して疎外感を感じる必要はない。少しばかり変わった体質で場合によっては戦闘に利用できる、今はそういった認識で十分だ。場違いな罪悪感で他人の顔色を伺って生きる必要などお前にはないのだから」

意外な人物からもたらされた朗報にリインの心を長きに渡って覆ってきた暗雲が晴れていく。

「貴方も俺の同類？」

「大雑把な括りではそうなるが、俺とお前では染まっている度合いが違う。一時的に身体能力を増大させるのが精一杯のお前と俺では様々な事情が異なる。リイン、お前が八葉の技の中でも、炎を伴った技を得意とするように——染まった人間にも各々が得意とする異能の使い方というものがある。エマやクロチルダのように上位属性の気配に敏感になり、導力魔法に対して高い素養を示すタイプ。このケースに該当する帝国人は非常に多い。」

だが、ほとんどは常人と大差の無い生涯を送る。なぜだか分かるか？」

「どうやらディックは小休止を取ることにしたようだ。ラインの身体に刺さっていた杭は、跡形も無く消失して微かな冷感だけが残っている。つくづく不思議な術だが、先程感じた焦りと畏れは、綺麗さっぱり無くなっている。」

刀を支えに起き上がるとラインは質問に答えた。

「能力の制御に道具や技術を習得する必要が生じるから……ですか？」

「そうだ。そしてその技術は表向きには秘匿され、廃れる寸前の状態にある。必要に迫られない限り、魔女の術を他人に教えることは<sup>コミュニケーション</sup>集合体の掟で強く禁じられている。……それ故に<sup>ヘクセン・ブリード</sup>魔女の劣属の魔術はあまり近代の戦闘に適応できていない。魔術の習得を志す連中にも、人気が無い技術としてひっそりとごく限られた一族にのみ継承されてきた」

「彼女らの術式が長けていることは主に2つ。幻惑と精霊への干渉。この2つに分類される。魔導杖の助けを借りて行う簡易アーツでも、エリオットよりエマの方が高い威力を実現できたのは、魔術の助けがあったからだ。もつとも

怪しまれることを怖れて、常アーツ適性の高い常人に見える程度に魔力の行使を抑えていたフシがあるが……あまり上手くいつてなかつたようだな」

「ディックさんは委員長のことをよくご存じみたいですが……彼女とはどういう関係で？」

「士官学院に入学する際の後見人というだけだ。捕まっているクロウも含めてな」

考えてみれば当たり前のことだ。いかに彼らが変わった経歴を持っていたとしても、士官学院へ入学するに当たって書類上の後見人や保護者を必要とする。実習や普段の課題で忙しく、気が付いたら仲間のそんな情報さえ知らない自分に自己嫌悪を感じてしまう。

「俺たちが学院で見た映像はでっち上げとマルスが言っていました、

クロウの経歴はどうなっている？あれも偽りということに？」

「いや……………クロウの出身が旧ジュライ市国だと言う話は本当だ。だがオズボーン宰相を撃った狙撃犯、騎神を動かしてお前を傷め付けた起動者<sup>ライザ</sup>。」

この二人は同一人物ではない。起動者の方がクロウの兄のクリスであり、もう一人の狙撃犯は名の売れた元軍人だったことが、リーヴェルト大尉からの報告で明らかになっている」

「その……………狙撃犯は？」

「大尉が射殺したそうだ。敵の襲撃を予め察知していたらしく、皇族のメンバーは皇太子のセドリックを除いて全員無事が確認されている。とはいえ、ヴァンダール家の面子が間一髪で間に合ったようで、結構際どい状況だったようだな。さすがはアルゼイド流と双璧を成す武門の一族といったところか」

「VII組のみんなと学院の人たちは俺が負けた後、どうなったんですか？」

「機甲兵と騎神相手に厳しい長期戦を強いられたらしい。再起不能に陥るほどの重傷者こそ幸いにして避けられたが、皆軽くない怪我を負う羽目になった。……………済まない。同時多発的に帝国のあちこちで導力兵器や爆弾テロが発生して、お前たちに苦しい戦いを強いてしまったことは軍に関わる身として詫びさせて貰う。……………俺たちの想定していた以上に敵の攻勢が苛烈で、カレイジャスを救援に向かわせるまでに一両日も要してしまった。」

蒼の騎神の搭乗者が急に苦しみ出すというアクシデントが無かったら、死者が出ていてもおかしくはなかったが、どうにかカレイジャスによる救援活動が間に合っただけ。お前が傷を癒している1ヶ月の間に反抗作戦の準備を整えていた。ただ破損した武器の修理、弾薬の補充には少々手こずらされたが」

安心して胸を撫で下ろすリイン。

「あの兵器は……………やっぱり騎神を元に作られたものなんでしょか？途徹もない装甲強度と最新式の戦車アハツエンすら凌駕する加速性能及び旋回性能。あんなものをこの内戦に投入してくるなんて」

「確かに機甲兵の機動力は厄介だが、それはあくまで敵が戦車に不利な状況のもとに強襲作戦を展開したからに過ぎん。戦車は歩兵から見た場合陸戦では脅威そのもので、よほどに強力な対戦車兵器でもなければ、罠を設置して塹壕にでも隠れるくらいしか手立てがない。

だがあくまでそれは歩兵から見た場合のみだ。飛空艇から攻撃する場合——例えば爆撃なら、ただのデカイ標的に過ぎん。

戦車の死角は真上だ、そこを突かれた場合、どんなに腕のいい戦車乗りにも打つ手はない。かつて百日戦役でリベール王国が、エレボニアとの絶望的な戦力差を覆して勝利できたのも、こういった兵器の弱点を突く的確な部隊運用があったからだと言われている。

まあその話は今回の内戦とはあまり関わりがないため割愛するが、その敗北から以後の帝国軍は飛空艇を駆使した戦力の拡充、作戦行動の見直しを図った。

主力が戦車なことは戦役以前と変わらんが、より高度な連携戦略が練られるようになった訳だな。陸戦では依然としてゼムリア大陸屈指の軍備を保有する軍事国家。その最精鋭と謳われる20もの機甲師団を相手に正面对決ができる勢力なぞ、世界中探せどそうはいない。まして機甲兵のスペックや総数、製造場所が判明した今となつてはカイエン公たちの命運は風前の灯火だ」

「もう少し大人を信用しろリイン。……お前はまだ武功を焦るような立場じゃない。オリヴァルト皇子から託された理念はあくまで帝国に置ける貴族勢力と革新派勢力に学生の立場で出来る範囲の細やかな影響を与えることだったはず。成り行き上偶々たまたまそうなただけでお前たちを私兵として使いたかつた訳でないことは理解して欲しい。……お前の善意も熱意も俺は別に否定している訳ではない。だが、お前の在り方は今の身の丈に合っていないとだけ、忠告しておく」

「俺の在り方がおかしいと？そうでしょうか」

「リイン、お前の在り方は軍人向けじゃない。過剰なまでに誰かを助けたがるその性格は、学生としては美点かもしれない。だが兵士としては褒められたものじゃない。自身の力や立ち位置さえ未だに確た

る道を定められない半人前が、他者を救うなど軽々しく語る資格はない。

今のお前に何がある？与えられた立場に借り物の武装、学院の中でほとんど完結してしまう狭い人脈と評価。それだけだろう？誰かを助けることと救済することは似ているようで全く別のことなのだ。剣も銃も突き詰めれば結局は敵を効率的に殺す道具に過ぎない。そんなモノをどれだけ巧く扱った処で一人で成し得ることなどたかが知れている。…………お前は生き急ぐには早すぎるのだ。それを決して忘れるな。栄光など目指すな、生還することを最優先で考えろ。お前の居場所は必ず何処かにある、諦めてならない」

「ご忠告、感謝します。最後にもう一つだけ聞かせて下さい。貴方は結社とはどういう繋がりだったんです？」

「奴等とは昔の仲間だ。俺の故郷、ノーザンブリアが滅びる以前からの付き合いになる。俺たちの同類や魔導に関わる者、ただ死にたくないと願い他者の命を喰らう者。様々な事情を抱えた者たちが集う闇の世界の秘密結社、まあそういう集団だ。俺は其中でも結構な古参兵ということになるか。はつきりとした在籍期間は分からないが、ざっと200年ばかりは執行者をやってきた。現在、帝国へ出向いている馬鹿弟子に劫炎ごうえんのマクバーンを名乗っている男が居る。――

――覚えの悪い弟子で頻繁に面倒を起こす。だが内包する魔力だけは大した領域でな。既に俺を超えているために、非常に厄介な相手となる。近接戦闘に持ち込めば、まだ技術の差で俺に勝ち目が出てくるが……………単身で正面对決は骨が折れる。何せ腐っても俺の弟子だ。炎を操る異能を持つんだが、あいつの最大火力はアハツエンの主砲に換算すると軽く見積もっても10発ぶんはある。まさにちよつとした戦車ばりの破格の攻撃力と外の理製の防壁を展開することによって実現した極めて高い防御力。星杯騎士団連中の聖痕を駆使した術でもなければ正面突破はまず不可能――全く面倒極まりない。挙げ句に最近は『最強』呼ばわりされてのぼせ上がっている始末。下らん言葉遊びなどにいつまでのめり込めば気が済むというのだ」

「あの……………話が脱線してますけど？」

「ああ済まん。俺から言いたいことはもう残り少ないがラインフォルト社の使用人シャロン・クルーガーは、俺の部下だから心配は無用だ。そしてお前がこれからやるべき事は単純明快。この内戦の行く末を見届けること、それだけだ。前線には招集がない限り出る必要はない。」

俺がお前に期待していることは、人間相手の戦争よりも魔煌兵の掃討と民間人の救援だ。それ以外の任務には参加する必要はない。行動に制限は付いてしまうが、内戦が終わるまでの辛抱だ。さて、今日はもう休め。

明日になったらまたⅦ組のメンバーとまた合流して貰う」

## 娘と歌姫

仲間との合流を果たしみんなの無事を確かめたりイン。ユミルの温泉施設鳳翼館で入浴後、とあるサプライズに見舞われることになった。

「ボクはアイリス。アイリス・バレストインだよ、よろしくね」

「「「「ええええええええ!!!」」」」」

一月振りに集合したⅧ組メンバーと協力者の面々が一斉に絶叫した。その狂騒のなかでサラだけが頭を抱えている。鳳翼館ホールについ先ほど姿を現したサラそっくりの少女からもたらされた爆弾発言に皆が強烈なショックを受けている。

「サラ教官……………お子さんがいらっしやっただんですね」

「いつ産んだのサラ？ 私たちに見せたオヤジ臭い独身貴族の姿は嘘だった訳？」

「信じられん……………！相手は何処の物好きだ」

七歳くらいの年齢だろうか。アイリスを名乗った娘は本当にサラそっくりだった。髪型をポニーテールにしている他は、サラをそっくりそのまま若返りさせたかのような容姿であり、サラと一目で親子だと分かる。アリサ、フィー、ユーススの順に疑問をぶつける教え子たち。

「ああー!!もう何よアンタたち!アタシが子持ちだったら何か悪い訳？ アイリスおいで」

とうとうキレて怒鳴り返すサラ。駆け寄ってきた娘を抱き上げて愛しげに頬擦りする姿はいつものがさつな教官ではなく、優しい母親の顔をしていた。

「ニヤハハ……………お帰りママ。久しぶりだね」

が、そんな優しい母子のイメージは一瞬の内に砕け散ることになる。

「教え子の皆さん……………ママは普段どんな生活をしてましたか？ お酒をガブガブ飲んだり、酔っ払って迷惑をかけたりにしませんでしたか……………正つつ直に答えてよね!!」

妙な迫力を漂わせたアイリスに慌ててサラが余計なことを聞くんじゃないとばかりに遮ろうとするが、

「あー、アイリスお腹空いたでしょう？ママとお昼ご飯食べよっか！」  
「ママは黙ってて……!!どうなの皆さん？」

厳しく言い返されうなだれるサラ。七才児とは思えない迫力を見せる娘に、ついつい本音が漏れるⅦ組メンバー。最初に口を滑らせたのはミリアムだった。

「うん！酷いモンだったよ！休みの日にねーママの部屋の掃除を手伝ったことがあるんだけど、部屋中酒瓶と脱ぎ散らかした下着と書類で足の踏み場も無いのっ！ま・さ・に・汚・部・屋って感じでさあ！よくあんなんで生活が出来るねってみんな言ってるよ!!独身世帯の男でもここまで酷い部屋は中々ないんじゃないかなって！ねっりん！」

「あ、ああ。あれは酷かった。女子たちから酒の匂いが日々強くなってきて、もう耐えられない！抗議する！ってことがあって、俺が酒瓶と空き缶を片付けて、書類整理をみんな肩代わりする羽目になった」  
「昔の友達から大量の酒をくすねてやったとかニヤニヤ笑ってたよね！あれ全部3日で空けて1週間くらいずっと二日酔いだった時あるよ！部屋から異臭が漂い出してバレてベアトリクスから大目玉！いやーあれは転入してきてから一番笑ったなあ！ねーフィー、サラって昔からこんな感じなの？」

うなづくフィー。

「そ、昔から筋金入りの酒好き。酔っ払ったままで仕事するなんて日常茶飯事——今だから正直に言うけど酔っ払ったサラに負けた日には、悔しさよりもやるせなさを感じて空しくなった」

こめかみを押さえるマキアス。酔っ払っても戦闘の技量が落ちないあたり、さすがは元A級遊撃士というかなんというかりアクションに困る内容だ。

「実家の近くに大衆酒場があるから酒の匂いには慣れていたつもりだったんだが、あれは比べ物にならなかったな。エマ君とアリサなんて、気を失う羽目になったんだぞ！二人をガイウスと一緒に保健室に



運び込んだあとに僕ら全員、マスクと保護眼鏡を着用して教官の部屋の掃除に駆り出されて、長期休暇をふいにした。こんな感じだったか？」

「その後でナイトハルト教官から全員夕食をご馳走になったが、正直言う割に合わんと思ってる」

教え子たちからもたらされる母親の散々な生活態度にニコニコしていたアイリスの表情もみるみるうちに不機嫌になっていく。頬を膨らませて母親を見上げる姿は親ならずとも微笑ましい気分になる愛嬌に満ちていたが、叱られているサラは最高に不甲斐ない気分を味わう羽目になっている。

「もう！ボクとパパが付いてないとホントにママは駄目なんだから！教え子の皆さん……本っ当にごめんなさい！ママのお仕事が忙しいのも分かるけど、汚部屋生産と酒乱はやめてよね！これじゃいつまで経ってもボクと一緒に暮らせないよう！」

娘に思いつきり頭を下げられて恐縮するリインたち。

「うう……ごめんなさいもう許してアイリス……」

あの日は散々ベアトリクス先生に叱られたんだからあー

サラはもうすっかり涙目である。せつかく娘と久しぶりに会えたと思ったら、生活態度を厳しく注意され事情を説明する暇も与えて貰えない始末。

「ダクメリ！皆さんにちゃんと謝るまでボクはママと一緒に暮らしてあげないからね！やっとな魔女の里から出て家族みんなで暮らせると思ったのに！ねえそうでしょパパ！」

どうやら娘のアイリスは母親と違って随分しっかりとした子らしい。

「その辺にしておきなさいアイリス。ママがすっかり涙目になってい

る」

「ちえっ！パパはいつもママに甘いんだからあー！」

先ほどから静かに話を聞いていたディックが、さすがに見かねて娘の鋭い舌峰を止める。どうもアイリスは父親の方によくなついているらしく、素直に言うことを聞く様子。

「へ？貴方がサラ教官の旦那さんなんですか？」

先ほどから苦笑いをして発言を控えていたエマが意外そうな表情で問いかけた。

「ああそうだが。お前たちには話していなかっただのか？」

「2年くらい前に結婚してたんだよ、色々事情があつて知ってる奴は少ないがな」

話に割り込むトヴアル。だがその前にエマが再度質問する。

「いいえ、その前にどうしてこの娘が私の故郷に？何らかの魔導と関わりがあるんでしょうか？」

「それにいつ娘を産んだのだ？元A級遊撃士が結婚するなら、それなりに話題になりそうなものだが」

「結婚する前にアイリスを産んだってこと？でもそれだと私と戦つた時期と合わないし……この娘ホントに普通の子？」

「当然普通の娘などではない。エマあんたもよく注意して“霊視”してみな。その陰気臭い父親と似た魔力を感じ取れるはずさ」

いきなり鳳翼館にやってきたのは腰の曲がった老婆だった。杖こそ突いてはいるが、足腰は中々壮健な様子で振舞いには確かな風格と知性を感じられる。老婆を見たエマは驚いて衣服を整え出す。非常に緊張した面持ちだ。

「おばあちゃん？どうしてユミルにいらしてるんですか」

老婆は大儀そうにソファアに腰掛けると、紅茶を飲みたいと従業員に声をかける。勝手知つたるその様子を第3者が見たらユミルの住民と勘違いしそうなくらい自然な動作だ。

「相変わらず察しが悪いねえエマ。その起動者ライザが敵に発見されないように結界を張っていたのさ。それ以外にも幻術やら暗示やらを仕掛けて、魔獣連中からそいつを守っていたんだ。結構な深手だったからねえ……そのボウヤの傷は。あたしもすっかり疲れちゃったよ。里の外しかも雪山で1ヶ月の間、そのボウヤが見付からないように見張る仕事は、老体には堪えて敵わないねえ全く」

「はあ。もう年なんだからあんまり無茶しないでよ。  
この人はアニエス・ミルスティン。私とヴィータ姉さんに魔術を教

えた先生です」

「ああよろしく頼むよ、士官学院のボウヤにお嬢さん方。ほう……：これは中々に奇妙な面子が集ったもんだ。

騎士の家系の娘、武器商人の娘、猟兵団育ちの娘に、妙な傀儡を使う娘。起動者のボウヤに貴族と平民のボウヤたち、それにノルドの血を引く者。それにあたしの弟子のエマ。さらわれちまったっていう間抜けを除いて、これで全員かい？」

「ああ。手間を取らせたなご老体。娘が世話になっている」

「フン、ホント母親に顔はそっくりなのになんでこうも性格が違うのか？やっぱりあたしのしつけが良かったからかね、どう思うよアイリス」

「ニユフフ、ママは反面教師だよ。ああはなりたくないって常に思わせてくれるんだ♪」

「ぐすつ、久しぶりに会えた我が子にこの仕打ち。ママは悲しいのです！」

「似合わない演技をしても無・駄！ママは反省しなさい！分かった……！！」

唸る娘の毒舌に形無しのサラ。

「ふう、全く誰に似たのかしらこの性格の悪さは。あんたの影響だったら恨むわよババア！」

「あたしや知らないね。仕事にばかりかまけて旦那と娘をほったらかしにして、早2年。自己管理くらいいい加減に覚えなツ！この酒道楽！！」

「なんですつて！元はといやあアンタたちの村が辺鄙過へんぴぎるからいけないのよ！列車代いくらかかると思ってたのよ！ノルド高原行く時より高くつくんだからね！そんなバカ高い運賃と時間をどうやって捻出しろつてのよ！あたしや暇人じゃない！！アンタたちから出向いて来なさいよ！霊脈だか何だか知らないけどお得意の転位術なりなんなりで！大体アンタ今の帝国の情勢をちゃんと分かってんでしょうね？忙しいのよあたしや暇人の魔女共と違って！」

「母親ならそれくらい苦労がなんだい？娘が会いたがってるって何

度も手紙に書いたじゃないか！仕事と酒道楽にかまけてはバカなカモフラージュに精を出してるバカ親だけは言われたくないよ!!」

売り言葉に買い言葉。親同士の醜い言い争いが始まってしまった。「届くのが遅すぎるのよ！前に何とか予定空けて行ってみたらアンタたち誰も居なかったじゃない！遭難するかと思つたわ！ディックが通らなかつたらマジで危ないトコだったんだからね！」

「仕方ないじゃないか！大っぴらに魔術をホイホイ人前で行使したら、また七耀教会のバカ共に七面倒臭い交渉やら小言やら言われながら、言い争う羽目になるんだよ！それに比べたらアンタが出向いて来た方がマシさね！」

「だつたらあの陰湿な魔術の罠だらけの山林はどういうつもりな訳よ！猟兵だつてあんな罠の山、二の足を踏むわ！要塞も真つ青の凝り具合！人間不信にも程があるわよババア!!」

「何さー！」

「この酒道楽ー！」

「石頭ー！」

「頑固者ー！」

「ぬううううう!!」

「上——等よ！表出なさいクソババア!!黒焦げになるまで畳んでやるー！」

「上等じゃないか！かかってきな雷娘!!」

今にも表に出て戦闘を繰り広げそうなほど殺気だつている二人を見て、ディックの表情は普段と何も変わらない。娘を抱え上げると、従業員に食事の準備を頼み、チップを渡すことも忘れない。妙にマメなトコがあるんだなとリインたちに思わせつつ、

「場所を変えよう。頭に血が上つた二人と話していても埒が空かん」

あつさり鳳翼館を出た。夫とは思えぬ淡泊極まりない行動に呆気に取られる皆だったが、仕方ないよな。誰だつて命は惜しい。

「放っておいて大丈夫なんですか？あのご老人はただ者ではなさそうでしたが、さすがにサラ教官の相手は厳しいのでは？」

やはり不安に駆られて聞いてみるリイン。

「心配は無用だ。あの二人は顔を合わせるといつもこうなるが、お互いケガをしたことは1度もない。じゃれあい、ガス抜き、そのようなモノだと考えろ」

「ちよつとからかいすぎたかもね。でも大丈夫だよ、実際に殴り合いになったことはないから。息が上がるまで言い争ったらお開きになるの。ボクが言うのも何だけどさ、まるで子供の喧嘩だよね」

七才児とは思えない落ち着きぶりを見せるアイリス。

ようやく落ち着いた気分で霊視を試みるエマ。

「確かにこの娘は普通の人とは違いますね。ディックさんと同じ強い氷の波動を感じます」

「そう俺の血を濃く引き継いだ証だ。顔はサラに似てきたが俺の体質と魔力は娘に強く引き継がれた結果になる。」

実はアイリスは生まれてまだ2年しか経っていない。母親の胎内にいた期間も、今の身体に成長するまでの期間も、常人より遥かに短い期間で生まれ育った娘だ。加えて俺から引き継いだ氷の魔力と高い身体能力、学習能力まで兼ね備えている。生まれて間もない頃は、当然力の扱い方など分からないから随分とケガをしたり、不意に漏れた魔力で家を凍らせてしまったり。様々なトラブルが生じた。

魔力の制御法を教えようにも俺は、永らく戦闘用として自身の魔力を使ってきたために幼いアイリスには教えてやれなかった。加えて蛇のメンバーの内部抗争に巻き込まれ

てしまったために、アニエス婆さんの手を借りることになった。婆さんが言うには魔法の修行を行う過程で魔力の制御法を自然に身に付けられるらしい。……………最初は半信半疑だったが、結果としては上手くいったようで安心して居る。身体の成長もようやく人並みに戻ったようだ。あとはこの娘が望んで力を解放しない限り、十分にに紛れて生活していくことができるだろう」

「リイン、お前も体質としてはアイリスに近い所があるかもしれん。だから娘の存在をお前たちに明かした。」

正直アイリスには窮屈な生活をさせていると分かっているのは内が……他に手立てもなくしてな。家族3人が揃って暮らすためには内

戦をはじめ、片付けなければならぬ障害を一つずつ潰して行かねばならない。まずは『蒼の深淵』ヴィータ・クロチルダについて俺が知っていることを話そう」

「はい。姉さんがどういう経緯で身喰らう蛇に所属することになったのか、今日こそ聞かせて貰います」

エマの決意に満ちた声を満足そうに聞き届けながらデイツクは語り出す。終わりにかけの魔人と魔女にまつわる経緯を。

「まず、ヴィータ・クロチルダは不完全な使徒だ。彼女の精神には2つの人格を持った女性が存在する。

一つはエマと同じ修行をしてきた魔女であり、オペラ歌手でもあったヴィータ本人の人格。魔導に高い素養を持ちながらも、オペラを代表する歌唱の世界と技術を愛好する少々変わった魔女。瑠璃色の霊鳥型の使い魔・グリアノスを使役し、魔女由来の強力な魔術を得意とする深淵の魔女。それが現在の彼女のたまかな肩書きになる。ここまではリインたちも知っていることだろう」

「さてここからが本題なんだが、ヴィータはこれといった犯罪行為に手を染めた事実はない。近年はオペラ歌手としての活動がほとんどメインで、使徒としての役割には極めて消極的な傾向が強かった。そのせいで本来配下として動かせるはずの執行者のほとんどに舐められている厳しい立場らしい。——当然と言えば当然の話だが。

彼女は被害者の面が強い使徒であり、本来は使徒になど選出されるべきでなかった人間なのだから」

驚愕の表情を浮かべるエマ。

「待って下さい。私が長から聞いた話では姉さんは——!!」

「禁を犯して里を出た、そう聞いていたらしいが真相は全く違う。実際は死にかけた先代の二柱に憑依されてしまったために、里を追われたという経緯がある。

リベール王国と戦う羽目になった百日戦役はお前たちも知っているだろう。あの戦役の裏で、帝国での様々な勢力が凌ぎを削る内乱が密に行われていた。ヴィクター卿がまだ『光の剣匠』と呼ばれる契機になった動乱だ。彼は内乱で幻獣とある使徒を討伐した。いか

に剣術の才に恵まれていようとも、本来なら打倒できるはずがない存在を退けるばかりか、あろうことか討伐までほとんど単騎で成し得る偉業。英雄の誕生だったと言えるかもしれない」

「始めて聞きました、父上にそういった経緯があつたとは。その使徒とはそれほど難敵であつたのですか？」

ラウラも父親の過去に驚きを隠せない様子だ。

「奴らを討伐するには、相応の武器と技術を必要とするのだが、当時その技術を持っていた勢力は七耀教会の実働部隊しかない。――

――近代兵器に例えると、歩兵が単身で戦車を3台撃破するようなものだ。しかも導力砲のような兵器でなく、大剣一振りですの人間が勝ち取つたというのだから、さすがに呆れたよ。伝承の聖騎士の再来などと騒がれるのも無理はない」

肩をすくめるアルゼイド子爵。

「単に師と才に恵まれたというだけの話だ。私が幼少の頃に知り合つた神父は何の因果か、守護騎士の総長を務める剣士であつたために“魔”に属する存在の“斬り方”を間近で見える機会があつたのでな。あとはこの宝剣・ガランシャルがその用途に耐えうるだけの強度を有していたからに他ならない。――偉業と称えられるような成果を果たした訳ではない。どんな信念で取り繕えど剣術は人を殺める技術の一端であり、それ以上でもそれ以下でもない。戦場で人を傷付ける行為は皆醜いものだ。そんなモノの優劣に人より優れていた所で、一体何が得られると言うのだ？」

そんな仮初めの名誉や流血に魅力を感じたことは1度もない。貴公もそれは同じだろう」

「だからこそ先代二柱を討伐するために手を組んだ。しかし……………謙遜もすぎると嫌みに変わる。俺たちと戦うための秘剣、こうも容易く修められると呆れを通り越していつそ笑えてしまう。しかも前任者より遥かに安定したカタチで禍祓いの技として使えてしまうとは、ね。」

……………話が逸れたが、あとは簡単だ。その時に死んだはずだった先代二柱が当時のヴィータに取りついて、醜い延命を凶っている。強い

魔力こそ持つものの、計画を遂行する上での知識や技術はほぼ全てが先代のモノ。かといって、迂闊に先代の手綱を離せば、身体を乗っ取られかねん二律背反。彼女にとって歌手活動はそういった現実からの逃避を兼ねてもいる。何とかして先代を消し去ろうにも、奴の生の執着は並大抵のモノではなく、正攻法での解呪は不可能。下手にそんな素振りを見せたが最後、地獄への道連れにされかねない。それが現在のヴェータを取り巻く厄介な現状。――同格の使徒からは侮られ、部下であるはずの執行者からも腫れ物扱い。不完全にして異端の使徒、故に

自由に使える駒として、クリスを利用して騎神の起動者として目覚めさせた。……先代の支配から解放されるために。細部は違っている可能性もあるが、おおよその所はこんな事情だ」



## 皇帝の私兵

その男が帝国にやって来たのは20年以上前になる。正体不明のアーティファクトらしきモノ“塩の杭”によって壊滅的な被害を受けた小国、いや元小国というべきか。

ディック・ドレクスラーはその国から30人ばかりの難民たちを率いて入国してきた。

かつてノーザンブリア大公国と呼ばれた風光明媚な宗教国は、首都ハリアスクを中心に発生した“搭らしきナニカ”の侵食によって甚大な被害を受けた。大地と生物、無機物をも例外とせずあらゆるものが塩に侵食され、物言わぬ塩の塊へと成す術もなく変えられていく。被災者に苦痛を感じる暇があつたかどうかは定かではないが、その光景はまさに地獄絵図そのものであつた。そのうえ杭の侵食速度は恐ろしいまでに迅速かつ、静粛に進行したために避難できた者はごく少数。いち早く異変に気付いた七耀教会の司祭が慌てて、総本山が存在する都市レミフェニアに救援と異変を報告したが、救援を待つ暇もなくその司祭までが、異変の犠牲者と成り果てる。極めて重大な危機と判断した七耀教会は、アーティファクトの封印に長けた専任の守護騎士第八位・吼天獅子バルクホルンを派遣、聖具・グレイプニルを用いて非接触のまま塩の杭を回収し、未曾有の災害はひとまずの終結を見ることになる。

幸いに国を統べていた大公はいかなる手段を用いてかこの災禍を生き延びており、その後の国の復興に尽力するはずだった。この災害の原因が発覚するまでは、その真実とは、大公自らがある降魔儀式の失敗によって人為的に発生させられた人災だと言う事実であつた。ディックと、派遣されてきた守護騎士バルクホルンの協力によってこの事実を白日の元に晒された大公は国家元首の地位を追われ、その後の消息を知る者は誰もいない。ある者は教会に外法として消されたと噂し、またある者は子飼いの部下の裏切りに遭い殺されたとも、実は大公の儀式は不完全ながらも成功しており、彼は召喚した悪魔の生け贄として喰われたというオカルトめいた顛末の噂話までが存在し

た。いずれにせよ、大公家の統治が崩壊したノーザンブリアは自治州として再出発することになるのだが、その道のりは非常に険しい。

七耀歴を紐解いて見ても他に前例など存在しない、未曾有の災害による被害のため復興は遅々として進まなかった。未知の物質による侵食によつて国土のゆうに3分の1が塩に汚染され、作物の育たない不毛の大地と化し、食料の生産も覚束なくなる。災害の混乱による疫病の流行や変質した大地に誘われるようにして続々と出現する悪魔や魔物といった、星杯騎士団が対処せねばならないような難敵との熾烈な戦い。当然教会側の人員だけではとても処理が追いつかない有り様で、エレボニアをはじめとする近隣諸国の援助を求めるほどの事態に発展するまで5日とかからなかった。

そんな国を追われた人々を率いて彼はエレボニア帝国の各地を巡り歩き、やがて帝都ヘイムダルへとたどり着く。当時彼と最初に接触した人物は、まるで死神にでも会ったかのように恐怖を感じて入国審査をすることさえ忘れそうになったらしい。

無理もない。見るからに軍人然とした屈強な体躯に険しい表情、災害の被害から市民を守るために受けたとおぼしき無数の傷は、かの地を襲った被害の爪痕を色濃く物語っている。さらに右腕を覆う時代がかつた漆黒の籠ガントレット手に加え、大型魔獣さえも両断できそうな大剣を携えているのだ。大剣は今でこそ鞘に納められているが、これだけ巨大な武器を背負っていながらディック・ドレクスラーを名乗る男の動きは驚くほどに静かで滑らかだ。身に纏う灰色の軍服こそ流血と土砂で汚れているが、今すぐでも戦場に駆け付けられそうなほどに男の動きと口調には、一片の疲労さえ見出だすことはできない。正直、救難に駆り出された正規軍の部隊が同行していなかったら、パニツクを起こしていたかもしれない。

そんな時だった。ヘイムダル街に似つかわしくない人物が彼の前に現れたのは。

「遠路遙々よく来てくれた。我々は君たちを歓迎しよう。ようこそ、緋の帝都ヘイムダルへ」

濃い金髪に真紅の装いが眩しいくらいに映える貴族服。背丈こそ眼前の陰気な男に比べて頭一つほど低いのが、確かな知性と強い情熱を感じさせる物腰は何気ない歩みでさえ兵士たちの浮き足だった心を解きほぐすだけカリスマ性を感じさせる。その貴族の名はユーゲント・ライゼ・アルノール。当時はまだ帝位を継いではいなかったが、後にエレボニア帝国の皇帝になる人物であった。

「……………アンタの頼みを聞いてやるから、代わりにこいつらに出来る限りの支援を頼む」

「もちろんだとも。私に可能な限りの支援を約束しよう。その代わりに私の力になって欲しい。かの大公国を長きに渡って守護してきたガントレット・ハーデス黒腕の死神の力をね」

「物好きが……………どうなっても責任は持てんぞ。アンタの器、精々試させてもらう」

こうして彼はノーザンブリアから引き連れてきた市民の移住と生活の保証等を引き換えにユーゲントの私兵となった。とは言っても雇い主には、ヴァンダー家という由緒正しい護衛の専門家たちと脇を固める練度の高い正規軍の兵士たちまで付いている。よほどの事態にならない限り、いや例え戦争が起こってもディックが出る幕はそうそうないだろう。彼が期待されている点はただ一つ——ゼムリア大陸各地で密かに暗躍する結社『身喰らう蛇』に関する情報収集及び対抗戦力としての活躍。場合によっては少人数限定ながら、仲間を加えることは許可されている。

ユーゲントからの指示はこうだ。

「お前は可能な限り目立つな。革新派にも貴族派にも、我々皇族にも蛇絡みの重大な事件が発生しない限り、味方する必要はない。遊撃士に紛れるなり、猟兵に紛れるなり好きにして構わん。その見返りとして私は君の力を借りたいのだよ。『黒腕の死神』、いや執行者N.O. X X『絶凍』のドレクスラー。それとも『將軍』、『総代騎士』の方が良かったかな？」

「称号など興味はないから好きに呼べ。俺は兵器だ、名誉も称賛も俺

の空虚を埋めるには至らない」

「ならばお前は闘争によって満たされる手合いか？だとしたら困るな。制御の困難な私兵など、恐ろしくて使えたものではないぞ」

「それも違う。俺はつまらない生き腐れの魔人だ。情は分かる、愛も分かる、人が有する感情総てを知っているなどと傲慢なことを吹聴する気もないが、永き生の果てに不要なモノは色々と封印してしまう。感情によって引き出される力を否定する積もりはないが、そもそも俺が劣勢に追い込まれることさえ、酷く珍しい。

お前たち人間が悪い訳じゃない。単に俺が著しく不公平な生き物というだけの話だ。衰え、人並みに老化していくように劣化した今でさえ、指先を多少曲げる程度の労力で完全武装の兵士50人程度は楽に破壊できる」

「それはなんとも凄まじいな。全盛期のお前に匹敵する相手は……：それこそ『鋼の聖女』か、『劫炎』くらいのものか？つくづく魔人というものは恐ろしい」

「そんな優劣に何の価値がある。格上だから座して無抵抗で許しを乞えと、冗談じゃない。軍事国家の代表とは思えん弱気な発言だな。いか奴等は確かに脅威的な実力者だが、人間が全く対抗できないような絶対不可侵の存在とは程遠い。『鋼』は本来、光の側に属する性質上守護騎士の『聖痕』は効きが悪い。代わりに俺たちのような闇の側に属する力を叩き込めば、眠りに就かせることは十分可能だ。当てることが出来れば、の話だがな。

現状あの女が帝国で槍を振るう可能性は低い。試練だ、審判だ、介諱だのと表現こそ回りくどいが、彼女らの勢力はあくまで敵手の成長を望んでの試練や仕合の様相を呈している。つまりは星杯騎士団と総力戦が避けられないようなケースを除いて、本気で戦争を起こす積もりはない、と判断しても良いだろう。配下が暴走する可能性もあるが、その場合は俺が昔の仲間を駆り出して潰すまでだ」

「もう片方……お前の弟子マクバーンはどう動くかな？」

「さてな……年中躁鬱のような無軌道な男だから俺にもはつきりとは読めん。未だに地に足が着かぬ、大した意思も持ち得ない半端者だ

が、力と暇だけは有り余っているから参戦してくるだろう。……………全く面倒極まりない」

「ほう。弟子だというのに随分な言い草だな……………それほどお前が恋しいということなのかな？」

「やめてくれ頭痛がしてくる。ただ単に進歩のない子供というだけだ。俺を超えるなどと息巻いてはいるが、本音は昔のように構って欲しいだけの甘ったれに過ぎない。力の使い方を覚えた程度で満足し、より高みを目指すだけの意欲も気概も持ち合わせない半端者。」

せつかく俺が人に紛れて生きる術を教えてやったというのにアイツときたら、すぐに投げ出して情けなくすがり付く始末。いい加減に愛想が尽きた。本気で俺の眼前に立ち塞がるというのなら、今度こそ引導を渡してやるのが師の務めのような気さえしてくるぞ。つくづく進歩がない、我ながら陳腐なことだ」

「それで……………倒せるのか？その馬鹿弟子は」

「倒せるとも。『鋼』と違って奴は御し易い手合いだ。」

『聖痕』は極めて有効。それに加えて奴は慢心しやすい阿呆でな。自分の異能の使い方がまるで分かっていない。溜めて撃つしか能がない愚か者。魔人としての身体強化に頼り切った洗練もへったくれもない戦い方が関の山。有り余る炎の威力に頼り切った隙だらけの砲兵スタイルと魔人としての本性をあらわにした際には、不細工で見るに耐えん蛮剣の使用が加わるだけ。本音を言えば、俺が相手をせずとも『光の剣匠』とヴァンダールの『金獅子』辺りが二人係りで挑めば殺すことは十分可能な範囲だ。あの二人なら組むにも問題は無からう。精々派手に叩きのめしてくれろと助かる」

「何だ、『火焰魔人』というからどれ程の猛者かと思っただが、『鋼』に比べて遥かに御し易いではないか？」

そうなると少々不思議だな……………何故そんな狩りやすいな手合いを封聖庁は野放しにしているのだろうか？」

「単に近所迷惑だからだよ。秘匿すべき魔力を戦車の如く派手にばらまき、市街地に被害を出さずにはいられない迷惑千万のトラブルメーカー。仕留めるには戦時に紛れて密かにやるのが一番と判断されて

いるのかもしれない。……………未熟千万とはいえ、一応は俺の弟子。半端な餓鬼なりに下手に追い詰められると、急に自力を伸ばしていく変な底力があってな。おかげで確実に潰すには念を押してやる必要がある」

「騎神、魔煌兵、機甲兵についてはどう見る？それぞれに厄介な敵と思うが」

「機甲兵など所詮は急場凌ぎの強襲兵器。シャロンにデータを解析させてみたが、あれは張りぼてもいいところの出来損ないだ。劣悪な整備性に操作の理不尽なまでの難易度、加速度を初めとする搭乗者への尋常ならざる負担。心理的なインパクトだけはあるが、実際はアンタたち正規軍が正式採用するほどの画期的な新兵器とはとても呼べない代物だよ。」

まず運用コストが高い。あんな代物をわざわざ量産するくらいだったら、主力戦車『アハツエン』を大量生産した方が遥かにマシだ。特殊な合金に間接部の磨耗しやすい部品の整備、急加速する際のスピードは一瞬だけなら戦車を抜くが、姿勢を制御する際に多大な負荷が搭乗者と機体にかかるために長時間の戦闘には全く向かない。

加えて扱いの難しさ。スペック通りの機能を十全に発揮できるような兵士は、層の厚い正規軍を擁するエレボニアでさえごく限られた最上位の猛者に限定されてしまう。『赤毛』のクレイグ、『隻眼』のゼクスといった機甲師団の団長クラス。領邦軍なら『黄金の羅刹』オーレリア。

ルグイン、『黒旋風』ウオレス・バルディアスくらいのものだろう。いずれの人物も部隊の指揮、個人の戦闘のどちらをとっても極めて優秀な将であり、替えの効かない人材だ。そんな人材をわざわざ乗せてまで機甲兵を使うのは、論ずるまでもなく非効率的であり、部隊の指揮にも影響は避けられない。

そこで苦肉の策として、魔煌兵を解析して作成した簡易運用システムを導入。通常の兵士でも扱いやすく、加速の際にかかるGを軽減する機能を追加しようやくまともに動かせるという体たらく。しかしこの場合は、大幅に出力を落とした状態であり本来の機動力から見

ると20%程度して発揮できず、攻撃力が大幅に低下してしまふ。ラインのヴァリマールに散々打ちのめされたのも、簡易操縦しかできない機甲兵の弱点がもろに出た形になる。稼働時間こそマニュアル操作より大きく延びるが、姿勢制御に難があり、死角から砲撃を喰らった場合は容易く転倒するという

笑い話のような防御の脆弱さが露呈する。リアクティブ・アーマーといった対戦車用のバリア装置を備えている機体にもあるにはあるが、搭乗者に高いアーツ適性がないと発動すらままならない代物で、とても機甲兵に生じる多大な被弾面積を覆い隠すような芸当は不可能。脚部周辺の脆弱な部分を瞬間的に防御することが精一杯で、包囲からの一斉射撃を喰らったらひとたまりもないだろう。まして飛空挺からの射撃まで加えられたら、あとは死を待つばかり。

これでは到底戦場の様相を変えうる新兵器には程遠い。金と見栄にあかして作っただけの欠陥兵器一步手前の代物であり、他国で開発が進められているオーバルギアの類の方が整備性、扱い易さ、運用効率どれを取っても上回るだろう。このような体たらくでは、正規軍が正式採用するようなケースは夢のまた夢だろう」

「騎神はどう使うべきか？まさか機甲兵ほどの欠陥品ではあるまいな」

「騎神も大局で見れば似たような代物でな。確かに機甲兵を遥かに凌駕する機動力と安定した出力、堅牢な装甲による高い防御力。加えて飛行能力まである。ただ古の時代の器物、現代の戦争にどこまで付いていけるかは未知数だな。あれは元々、魔煌兵を相手どるために作られたモノでこの地の霊脈などを抑える機能も付加されていたらしい。

アーツをより強力にしたような機能もあるいはあるが、起動者の霊力などの消耗が激しくなるために、こちらもやはり長期戦は不向きだ。オマケに整備性の問題もある。機甲兵と違って、騎神には自己修復機能があるが核にダメージを深く負った場合は機能停止に追い込まれる。機能を拡張しようにも、あれを作った大元の製造者はとつくの昔に滅んで今では末裔しか生き残ってはいない。

あまりアテにするのは考え物だな」

「緋の騎神をあの魔女はどう使う？あれは変質した化け物のような存在だ。一度封印から解放が成されたなら、帝国の存亡にも繋がりがねん」

「まずいことにクロチルダは、魔王の凱歌を知ってる。復活させることは可能だろう。」

ただ彼女の計画が順当に進んだ場合でも、魔王の影程度の出現に留まる。彼女はあれを呼び起こして、自分に取り付いた先代を完全に消滅させて自由になりたいと考えているのだ。——だが、先代の意識が残る現状では色々と妨害を受けており、順調とは言い難い。計画に様々な無理を押し通したせいで、他の使徒からも介入を許す始末」

「奴等がまた内部抗争とはな」

「所詮は組織、人の集まりだ。珍しくもなるともない。わざと格下に負けたり、華を持たせたり、そういった演技に嫌気が刺した執行者も最近増えてきたらしくてな。せっかくの戦時に乗じて、騎士団と本格的にやり合う腹積もりらしい。そのついでにクロチルダの願いが叶うならそれもよし。混乱に乗じて魔煌兵なり、幻獣なりと潰し合いたいという物好きばかりがウズウズしている」

「それを抑えるのがお前の役割だろうに」

「出来る限りは抑えるがかなりの激戦が予想される。それと、オリヴァルトやリインには釘を刺して置け。理想は立派だが、現状で戦況を掻き乱すことは危険だ。」

VII組は一時的に魔煌兵相手の遊撃手に据えて、解放戦線の排除が終わるまで監視する。何なら宰相なりアンタなりの居場所をわざとリークして、誘き寄せてもいい。

所詮今の状況など俺たちにとっては前座に過ぎない」





## 悪童VS神速

「シャアラアアア……!!」

「な、なんですよ!」

響き渡る暴力的な咆哮と共に奇怪な軌道の打撃が白亜の騎士に打ち込まれる。魔煌兵狩りと内戦によつて生じた民間人の保護等を行う、Ⅶ組メンバー相手に名乗りを上げた騎士甲冑姿の少女《神速》のデュバリイを名乗った女騎士に目掛けて野蛮な拳士が乱入してきた。

ぎらついた黒瞳と収まりの悪いワインレットの髪。この戦地にあつて寸鉄ひとつ身に付けない軽装と首に掛けられた風変わりな羽根飾り。見た目は小洒落たファツシヨンの青年だが、軽装越しにもはつきりと分かるほどの強靱な体軀は見るからに危険な雰囲気を漂わせている。

初撃を凌いだデュバリイを相手に愉快げな笑みを浮かべながら拳士は名乗りを上げる。

「へえ………巧く受けたじゃねえかよガキンチョ!凌いだ腕に免じて名乗つてやるぜ!俺はアスラ。アスラ・ヘイゼルつてモンだ。『破戒』殿の命により、これより『幻焰計画』への介入を開始させてもらうぜ!」

「くっ!また無軌道な手合いがぞろぞろと……!貴方も立場は違えど使徒の配下でしょうが!!世迷い言をほざいてないで、さっさと士官学院のメンバー相手に戦いやがれですわ!」

打ち込まれた打撃から立ち直りつつも、怒りを込めた口調でアスラに命令を下そうとするデュバリイ。だが、アスラは意にも介さず笑うのみ。

「カカカカカ!!知るかよンんなもん!テメエが俺に命令できる立場だとも思つてんのかよ、クカカカ!!俺は既に破戒殿から命令を受けている!深淵に味方する奴は皆敵!喧嘩をふっかけて好きに潰せと

「よお！」

「花火はデカい方が断然いい！手加減、試練、様子見イ？知らねえ、見えねえ、聞こえねえ！なんだそりゃ?!」

「テメエが纏つてるモノは何だ？武器だろ、防具だろ？」

「飾りじゃねえよなあッ！だつたらお上品ぶつてねえで掛かつて来いやッ!!」

荒々しい震脚と共にヒビが走る大地。鳴らされる拳に荒々しい雄叫び。会話が成立する相手とは思えない狂気を孕んだ拳士。周囲の大气が紫紺の闘気で揺らめき、彼が修めた尋常ならざる巧夫クンファイが眼前の騎士を粉碎すべく唸りを上げる！

「チッ！いいでしょう！アルゼイドの娘の前にまずは貴方から始末して差し上げますわ！来なさいッ！アスラ！私の剣と貴方の拳、どちらが上かはつきりさせてやろうじゃありませんか！」

「ハッ！上等じゃねえかよデュバリイ!!東邦より伝わりし我が羅喉流ラウリウ武術……とくと味わうがいいぜ！」

途端に交錯する両者。先手こそ譲つたもののデュバリイとて、結社が誇る最高の戦闘部隊である鉄機隊に属する騎士——それも筆頭を任せられた実力者だ。常人には視認することも叶わぬほどの剣速と結社内部でも並ぶ者のない俊足。さらに敏捷性を精霊との感応を経て最大限に高める精霊銀の鎧と盾による堅牢な防御。この二つがデュバリイが筆頭を任せられた最大の理由であった。小柄な女性でありながらかなり大振りな剣を扱う技量も彼女が仕える主人・アリアンロードによる苛酷な鍛練によって、達人の域にある。不意を突かれて一時は防戦に追い込まれたものの、正面からの激突では剣があるぶん先手を取るとは容易い。まずは拳法使いの生命線たる機動力を削ぐべく冷気を込めた袈裟斬りを繰り出すデュバリイ。

「温いぞー」

冷気を纏った袈裟斬りが、あろうことか回し受けで捌かれる。腕に纏った闘気と刹那の見切りが成せる見事な防御。とはいえデュバリイもさすがに素人ではない。一撃を捌かれたくらいで隙を見せるような柔な鍛え方はしていない。続けて一瞬の遅滞もなく、刺突と斬

撃を交えた連撃に移行してアスラが得意とする拳法の間合いに入らないように牽制する。減衰したとはいえ剣に付加された冷気は未だに健在。僅かでもアスラが受けをしくじれば、掠めた冷気がたちどころに彼の自由を奪うはず。

堅実にして的確な技の選択——ところが当たらない！

いなされる、かわされる、読まれて反撃を受けている！これは一体どんな手品だというのだ？スピードはほぼ直角、互いにダメージは無し。未だにアスラは拳が届く距離まで接近を許されてはいないというのに！

ゆらりゆらりと時には緩やかに、時には残像が映るほどのスピードでデュバリの打ち込みに対して最適な捌きと反撃を剣越しにでも成立させている奇怪な闘法。これは一体？さして大した力を入れているようには見えぬというのに、いつの間にかたたらを踏む回数が増えていく。体が泳いで、体勢を徐々に崩されていく異常事態。

おかしい、私はそこまで力を入れてはいないはずなのに——！

「不可解ってツラしてんなあ？無理もねえ。だが種を明かせば簡単なことよ！俺が有する異能は”衝撃操作”。厳密には衝撃が伴う指向性のエネルギー操作ってやつ。冷気だろうが、熱気だろうが、俺が認識できてりや関係ねえ。掴んで捌き、透して砕くも意のままよ！——

——こんな風にな!!」

アスラの闘法を警戒して僅かに動きが鈍ったデュバリイ目掛けて恐るべき崩拳が打ち込まれる！一瞬の隙を突いて繰り出された拳は、デュバリイを紙屑のように5アージュほども吹き飛ばし地を這わせる。

「クククク………ハッ——ハハハハ!!どうよ？東邦の廃れた拳法も捨てたモンじゃねえだろ!?小娘よオ！効いたか、知らんか、分かるんか？応とも！ならば教えてやろう！これぞ羅喉流！泰斗流の陰で密かに受け継がれてきた暗殺拳……その真髄よオ！カカカカカ!!」

泰斗流とは西ゼムリアよりも東邦の大陸を発祥の地とする古流武術のひとつである。人体に流れる氣を制御することによって武器に

も劣らぬ威力を実現させる東邦の武術の大家としてカルバード共和国では広く普及しているらしい。ライン・シュバルツァーが修めている剣術流派・八葉一刀流にも氣を扱う術と共に大いに影響を受けているとのことだ。そんな泰斗流は相手を殺めることよりも活かすことに重きを置いた”活人拳”を理念とするのに対して、その対となる流派である流派・羅喉流にそういった理念やお題目の類いは存在しない。あるのはただひたすらに相手の命を奪うために粹を凝らした暗殺技巧に他ならず。動乱の時代にこそ隆盛を極めた二つの流派は、やがて戦乱が収まるにつれ歴史の表舞台から姿を消し、今では《銀》を代表とする古い武人の技巧を継承する暗殺者たちへのみ、細々と受け継がれてきたという。

(ううう…!!油断しましたわ!この私が地を這うことになるなんて…!!羅喉流、やはり悔り難い暗殺拳ですこと)

吹き飛ばされたデュバリイだが、先ほどの一撃のカラクリは読めてきた。アスラは先ほどの立ち回りから受けた衝撃を徐々に蓄積させ、自分の攻撃に合わせるタイミングで一気に衝撃を解放して大きく体勢を崩したのだ。いかな技とて万全の体勢から放たねば、殺傷力は激減し隙を晒すだけの愚行に成り果てる。アスラの異能はそれを意図的に発生させるまさに攻防一体の拳法と言えた。

「おい、もうへばったのかよ!体勢崩す程度に加減してやったんだ。とっとと立てや!ウスノロかテメエ?《神速》の名は名ばかりって訳か?失望させんなや!!」

もつと熱く、魂を気迫を、意地を……!振り絞ろうや!信じてるぜえ!テメエらが結社最高の戦闘部隊だとよオオ!

ンな体たらくじゃあ《鋼》殿も失望するだろ、飽きさせんな?」

「万象全てが舞台に見えるような外道の走狗に過ぎない貴方に私が主人に捧ぐ忠義など分かるはずがありませんわ!

——その侮辱……!万死に値します!!」

ゆつくりと立ち上がったデュバリイ。その瞳には先ほどまでの油断や驕りは一片も見られない。神速のデュバリイにとって主人の名誉は絶対。それを侮辱する存在にはもはや一片の慈悲さえ必要ない

！

かざした剣に全力で闘気を込める。極限まで収束された白銀の剣気は、アスラのような「闘」の属性を帯びた存在に対して特効的な力を発揮する。いかに彼が得体の知れない拳法と異能を所持していても関係ない。主人から授かった技巧の全てを持って眼前の難敵を排除しよう。それこそが騎士の本懐、正義に捧ぐ愛故に。

今までとは明らかに異なる真剣な殺意にアスラの喜悦がさらに深まる。なんだ、なんだよ？やればできるじゃねえか！《劍帝》亡き今では、結社最高位の剣の名手は伊達ではなかった！火付きがちつとばかり悪いだけで、底力は紛れもない本物だ……!!惜しむらくは命の危機とはほど遠い模擬戦ばかり重ねたせいで、激怒させないと雑念が完全には消えぬのが玉に瑕だが——中々どうしてやるじゃないか！心地よい殺気を孕んだ剣気。まさに我らが打ち砕くに相応しい獲物！廃れた精霊魔術を交えた旧き聖騎士の末裔。その再来として申し分無い姿だ！

「ハッハア!!ようやくケツに火が付いたかい騎士様よオ！いいぜやろうぜ心ゆくまでツ！俺ア前から一度騎士気取りの大根役者を殴り砕いてみたくてなアア！」

途端に炸裂するアスラの足元。挑発の合間に溜めていた氣と衝撃をまとめて炸裂させ大地をも震撼させる踏み込みと共に一瞬の内にデュバリイとの間合いを詰める。

羅喉流が泰斗流の影に埋もれてしまった理由は、「異能者」しか完全には使いこなせない流派だから。発生させた衝撃を任意の場所に移動させる技巧そのものは人間でも再現させることは可能だ。八勁などと呼ばれ泰斗流にも伝わっている技術のひとつだが、アスラが駆使用する羅喉流はさらに殺傷力を高めるために「異能」による完全な衝撃操作と対象の構造把握という二つの関門を突破することで、不条理なまでの機動力と攻防一体の力を発揮する。無論神ならぬ人の身であるアスラが捌ける衝撃にも限度はあるし、地に足を付けていない状態では衝撃操作が不可能になるという弱点は存在する。捌けるのはあくまで衝撃、厳密にはそれに伴う純粋なエネルギーのみであり、

熱や冷気を伴う攻撃はアスラが直接防ぐ必要があるし、同族相手の攻撃や光の属性を宿した攻撃も捌くことができない。離れた相手に出ることが震動による妨害くらいしかできず、戦車の主砲を何十発と凌ぐようなことも不可能だ。あくまで拳法をより強力にするための手段であり、”異能者”としての力の大きさは実のところ、リインと大差ない。正直な話、制限時間も付きまとう。

だが、そんな欠点など端から承知だ。元から汎用性などを求めるような殊勝な性格はしていない。不完全上等、不合理、非効率、関係ない。自分はいくまで拳士に過ぎぬ身。師より継承した技を持って舞台を華々しく彩るのみ。

「そう、そうだよ！戦はこうでなくっちゃな！こうでなければ張り合いが無いッ！いつまでも執行者候補なんざ真つ平ご免よオ！テメエを倒して俺はⅦ番目の席に着く!!」

我が勝利をここに導け、我らは朽ち得ぬ凶星なり——！」

乱舞する拳と剣戟の多重奏。デュバリイは奥の手である分け身を解禁して、多方向から一斉に斬撃を繰り出す。分け身とは、自身の姿をそっくり映し撮った幻に魔力を込めて自在に動かす高等技術だ。本来なら攻撃を受けたと相手に誤認させる際に用いられる補助的な技に過ぎないが、適性の高い彼女が使えば、恐るべき包囲網からの波状攻撃すら可能とする。亡くなった剣帝でさえ、分け身を利用した攻撃はごく単純な技に限定されただけに、これには驚いていたようだ。

「寝言は寝てから言いやがれですわ！残影剣!!」

「豪炎剣！」

「豪雷剣！」

「ただでさえうるせえ奴が3倍かよ！耳障りって次元じゃねえな！」

とんでもないフットワークと防御技術で3人に増えた相手にもアスラは容易く対処する。裏拳が分け身を薙ぐ。膝と肘を用いた打撃が分け身を打ち伏せる。手刀や貫手、掌底が空中で鎌首をもたげる蛇を思わせる軌道で襲来。本体以外の分け身を打ち砕いて尚、乱拳の嵐は止まらない。

（くっ！忌々しい拳法ですこと。機動力では私が勝っているはずなの

に、どうしてこうも主導権を握られっぱなしなんですの！腹立たしい！）

光を纏った剣戟が捌けないと見るや、守勢に回っての体勢崩しを諦めて、怒涛の乱撃を駆使した削り合いに持ち込む。執行者No. VIII《痩せ狼》ヴァルターにも比肩し得る卓越した格闘センスだ。これほどの拳士が執行者候補に留まっていることが信じられない位。

「そろそろそろさっ！いざ見切れエ!!」

実のところ圧倒しているかのように見えるアスラもそう優勢という訳ではない。初見では対処が至難の暗殺拳に翻弄されているかのようなデユバリイだが、徐々に衝撃操作に慣れてきているのか反撃が目に見えて鋭くなっていく。

相手の呼吸を読み、多彩な変化と緩急に富んだ動きで翻弄する。一見隙だらけの挙動に見える打撃を適格に叩き込むため、残像を利用し意識の隙間に忍び込む独自の絶拳。

「手緩いですわよー」

それを勝負の中で見切りつつあるデユバリイ。脚にも鬨気を纏わせて、操縦された衝撃を完全に相殺する。種が割れてしまえば対処はそう難しいものではない。要は二つのベクトルに対処すればいいのだ。命中した途端、濁流に飲まれるようにして体勢を崩されたのは、衝撃を移動させて本体の打撃と同時に全く別のベクトルが生じていたからだ。踏ん張ろうとする体の動きを阻害する方向で作用させられる衝撃操作。打撃と同時に足払いや投げ技を決められるようなものだ。種明かしが無かったら、デユバリイにも到底見切れなかったろう。

「種の割れた邪拳ごとき、見切ればどうということはありません！」

「ほざけや小娘！濁流拳ひとつ見切ったくれエで調子に乗んな！勝負はまだまだこれからだぜ！」

散々殴られてようやく分かったが、アスラの衝撃操作は収束と分散、どちらか片方しか行うことができない。凄まじい手数でカモフラージュされているが、一撃一撃が必殺の威力を秘めているなら自分分は既に死体になっていないとおかしいことになる。やけに軽いと



思ったのだ。身喰らう蛇の使徒第四柱《破戒》のガルドシユの近衛部隊たる”飢え渴きし獵犬”の筆頭隊士を務める手練れの男の拳としてはあまりに軽すぎる。

飢え渴きし獵犬——デュバリイが所属する鉄機隊のように盟主に功績を認められた一部の使徒は、独自に私兵を飼い慣らすことも許される。アスラは第四柱を本来なら守護する役割があり、使徒の命がなければ私闘の類いは許可されない。それだけに普段は獵兵に紛れて雑魚狩りに徹さなければならず、フラストレーションが溜まる一方であった。

「さあ……こつからギアチェンジだ。しつかり付いて来いやデュバリイよオ！」

態度と口調で誤魔化されているが、この男とヴァルターは同じような拳士でありながら、まるでタイプが逆なのだ。泰斗流を基礎の技とし、絶大な威力の剛拳を用いるヴァルターと衝撃操作の異能を持って完成する羅喉流を得物とするアスラ。

どちらも結社を代表する拳士の端くれだが、一撃に重きを置いている分対策を立てやすい痩せ狼と多種多様な連撃を得意とするアスラ。ヴァルターを剛の拳士とするならアスラは柔の拳士に分類されるだろう。荒々しい口調に惑わされがちだが、アスラは強敵相手には確実に力を削いでいくスタイルを取る男だ。単純な拳の威力では痩せ狼が勝るだろうが、見切り難さと技数ではアスラが上を行く。ヴァルターが餓狼なら、コイツは毒蛇だ。

ゴキリと指が鳴る。鉤爪のような形に構えた指から紫色の氣が煌めく。続けて荒々しい突貫から勢いよく爪を薙ぎ払う攻撃に出た。あまりのスピードに大氣に真空が生まれ、デュバリイの頬を浅く切り裂く。衝撃操作を自身の機動力の向上に回して、先ほどよりも遙かにスピードを上昇させた乱拳。だが——

「速さ比べなら私の独壇場です！止まって見えますわよ！」

余裕を持って放たれたデュバリイの斬撃が、アスラの作り出した真空刃を吹き散らして胸板に浅い裂傷を刻む。

「おお、さすがにコイツは効かんか！だがよオ！そろそろ終いにしよ

うや！」

「望むところッ!!」

また新たに分け身を作り出すデュバリー。幾体もの残像と共に眩い閃光を帯びた斬撃が乱れ飛ぶ。奇策は取らずあくまで正道を取る迅雷の如き斬撃の乱舞。打撃で少なからず痛手を被ったとはいえ、その剣気には一片の曇りもない。

対するアスラは今まで勢いは何処へやら。成すがままのノーガード。一応致命傷こそ免れてはいるものの、全身に次々と斬撃を刻まれ、たちどころに今までの優位が崩壊していく。

「かつ——グオオオオッ!!」

(何故ノーガード?何か策でもあるんですの?)

訝しげに思いながらもデュバリーは連撃の手を緩めない。ここで手心を加えたが最後、魔拳士の逆襲に遭うと第六感が警鐘を鳴らしている。故に全力で剣を振り抜くのみ——!!

「プリズムツッ!キャリバーアアア——!!」

自身が研鑽してきた剣術の集大成、眩い閃光を帯びた剣戟の乱舞を叩き込み、最後に横薙ぎの一閃でトドメを刺す奥義・プリズムキャリバーを放ったデュバリーだったが、思わぬ形でその奥義の成立は妨害される!

「クハハハハッ!!捉えたぞ!今度は俺の番だ……!!」

見れば最後の横薙ぎをアスラの右腕が受け止めている。

全身から大量の出血を伴いながらも、その表情はただ喜悦一色。嬉しい、嬉しい。殺し合いが愉しくて堪らない!流血、失血、劣勢。無傷の勝利など興が削がれる。やはり戦はこうでなくては!鮮血に染まり、罵声を浴びせて、敵の血潮に酔い痴れて戦うのが一番いい。全身に刻まれた裂傷など久し振りだ!

「羅喉流・奥義!飢血刀陣!!」

アスラの流れ出した血液が、さながら鎧のような刃物状の刃と化してデュバリーの脚を地面に縫い付ける。

「ぐっ——血でトラップを作るなんて!」

全力で刺さった刃を抜こうと足掻くデュバリーだが、刃には強い呪

詛が塗り込められているらしく、下半身が全く言うことを効かない。  
「暗・剣・殺ッ!!」

今までのお返しとばかりに叩き込まれる絶拳の三連打!

肘打ちがデュバリイの鎧を叩き割り、続けて放たれた旋風脚が生身の肉体を蹂躪する。甚大な衝撃が肋骨と内臓を掻き乱し、意識を尋常ならざる苦痛が埋め尽くしていく。トドメに全身の氣を練り上げた掌打がデュバリイを弾き飛ばす!

「これにて決着! どうよ、久し振りに全力で負けた気分は。悪くない仕合だったぜ、神速よオ」

「カツ……………! ゴボグウ! ううう! ……まだです! 私はま…だ…! 負けてはおりません!」

弱々しく立ち上がったデュバリイだったが、さすがにさっきの三連打は効いたようで、恥も外聞も無く内臓を破壊されて逆流してきた血を吐き出している。脚にも深刻なダメージを負い、膝が笑っている。美しかった白亜の鎧は見るも無惨に破壊され、吐血した鮮血が下着までもドス黒く染めている。誰が見ても明らかな敗残者の姿――

未だに意識を失っていない意思力は確かに見上げたものだが、もはや勝敗は誰が見ても明らかだった。何本の骨を折られ、内臓を傷付けられたのか。常人ならばあまりの痛みにショック死していてもおかしくないほどの重傷を負いながらも、勝利を諦めない精神力は本当に大したものだ。

「どうよう? 悔しいか、痛てエか、悲しいか? けど、これがお前さんがボウズたちにやろうとしたことなんだよなア。事情も明かさず、ただ氣に入らないから暴力振ります。配慮はしますが死んだら許して下さい? お前、一体何様のつもりよオ! 戦うなども、侮るなども、欺くなどとも言わねえよ! 俺にそんな権限も資格もないからなあ!」

震える脚を叱咤して立ち上がるデュバリイに向かって容赦ない罵声を叩き付けるアスラ。氣遣いだろうか、嘲笑だろうか、判断が付かない感情のこもったセリフを滔々と語りかける。

「けどよオ! テメエ騎士だろ、名代だろ、役者だろうがよ! 陳腐な脚本でダメ出し喰らったからって諦めて、どうすんだよ! 脚本に従うだけ

が役者に在らず！観客の反応を観察し、吟味し、期待に答えてみるや！プロだろテメエはアア！クソな脚本なんざ破り捨てて観客を沸かせてみるや！それもできねえってんなら仕方ねえ！テメエのお命ここで頂戴ツ!!思い残さず冥土に逝けやアア!!」

流血にまみれた身体と云えどアスラの拳と機動力は未だに健在。さすがに無傷の状態に比すれば、見る影もないがそれでもその拳の冴えはⅦ組のメンバーたちが対処できる域になく、デュバリの命運はここに尽きたかに思われた。だが————致命の一撃は来なかつた。

「そこまでです！拳を引きなさい、《乱拳》のアスラ。

我が部下にこれ以上の暴威を振るうなら………今度は私が相手になりましょう！」

燦然たる黄金の輝きを纏った騎士がアスラの拳を巨大な騎兵槍で防いでいる。顔こそ武骨な面で覆い隠されているが、その清涼な声音は女性のものだ。はつきりと怒りを滲ませた立ち振舞いの中にも隠しようのない覇気と気品がある。

「おお……これはこれは鋼殿直々のお出ましとは！」

拳を防がれたにも関わらずアスラは一礼する。

「拝謁賜り誠に恐悦至極に存じます。鋼殿の意向であるならば是非もありません。ただ一言苦言を呈させて頂くなら、これは貴女の監督不行き届きですなア！」

「未だに自分に合った聖剣なり、魔剣なりを手に入れてもいない上に、貴族社会とは無関係の堅気じゃねえつすか？」

素質自体はかなりのモンだ、さすがはヴィクター卿のご息女殿。その若さでもう普通の材質の剣じゃ、合わなくなつて来るとは大した資質。磨き甲斐のある原石そのものさ。そんな大器を持った相手に対してコイツのやつた演技は何だよ！まるで駄々っ子じゃねえか、醜悪にも程がある。

そりゃ包み隠さず全てをさらけ出せとは言わねえさ。ただなあ！何がしたいか、させたいかくらいははつきりさせとかねえと、延々噛み合わんだだけだぜ！貴女方が奉ずる騎士道とやらの照らし合わせる

と、コイツの行いは蛮行としか言い様がねえ！さすがに目に余るってウチの頭もお冠よ！」

「忠告は胸に留めて置きましょう。ですが貴方は少々やり過ぎた。即刻私の前から消え失せなさい！」

「ハハハハッ！いいね、いいね、実にそそる！堪らんわ！」

んじやまた。次はもつと激しく踊ろうや、カカカカ!!」

鮮血に染まった魔拳士は黒い魔法陣から転移していった。跡には重傷を負ったデユバリイと戦闘を見守っていたⅦ組メンバーだけが残された。